

- 1 派遣期日 令和6年6月28日（金）
 2 派遣先 学校名（会場名） 千葉大学教育学部附属中学校
 所在地 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33
<https://www.jr.chiba-u.jp/>

3 研修内容

千葉大学教育学部附属中学校の研究主題は「多様な実践から考える個別最適な学び～学習者の視点と授業者の視点」というものであり、それを踏まえた上で千葉大学教育学部附属中学校社会科部（以降、同校社会科部と略記）では、「個別最適な学びを取り入れた社会科授業の在り方～学習の個性化による社会認識の深化に着目して～」という研究主題を設定し、令和4年度より継続して2年間研究を続けてきた。この研究の目的としては、「社会認識の進化を念頭に置きながら、学習課題の選択・決定をはじめとした学習の個性化に焦点を当てた単元・授業づくりを通して、社会科授業に対する個別最適な学びの効果的な取り入れ方を探る」こととされた。

そして、同校社会科部では、社会科における学習の個性化について、「生徒自身が個々の興味・関心に応じて学習課題を設定したり、学習過程を計画したり、その解決を目指したりする学習を通して、新たな社会認識を獲得すること」と定義した。さらに、森分孝治氏の社会認識に関する理論をベースとしつつ、社会的な見方・考え方を働かせる学習活動によって事実に認識を獲得し、批判的思考をもって価値的判断・評価的判断を伴う学習活動も行うことで、価値的認識も獲得することができるとした。双方の認識が互いに影響を及ぼし合うことで、社会認識が深化するという授業モデルを、同校社会科部では開発し、授業実践を積み重ねた。

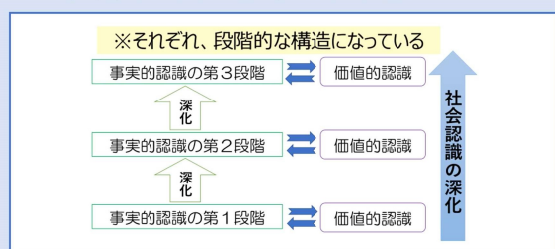
一方で、千葉大学教育学部附属中学校研究綱要第52集にも指摘があった通り、社会科において個別最適な学びを取り入れる際の課題として、「生徒自身に学習を委ねる部分が大きいため、社会的事象に対する一面的な理解や認識につながりかねない」ことを指摘した。その課題を克服するために、協働的な学びも単元の計画に適切に位置付けることで、「自身の社会的認識を他者の社会的認識と比較・検討することで、その社会的認識が深化されたり、変容したりする」という仮説を立て、授業実践の方を行った。

上記の考えを踏まえた上で、2年間の研究の成果として、高橋晶教諭による中学校1年生地理的分野「追究！EU」という単元の授業と、河西麦教諭による中学校3年生歴史的分野「モダンクエスト～過ぎ去りし時を求めて～」という単元の授業を、研究授業として公開した。

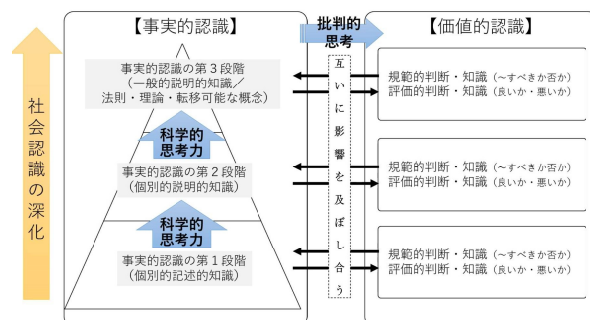
先述の通り、社会科において個別最適な学びを実現するのは非常に難しい。私自身もどうすれば実現できるのか非常に悩ましいと感じていた。そのような中、同校社会科部では学校全体の主題との関連性も意識して、授業を行う教員側の考えるより良い個別最適な学びと、授業を実際に受ける生徒にとってのより良い個別最適な学びの双方の実現を目指すこととした、非常に興味深い研究主題で授業実践を行っており、私自身の授業力向上を図るうえで非常に示唆に富む内容であると感じたため、同校で令和6年6月30日に開催された研究授業及び研究協議会に参観させて頂いた。

IV 研究の内容

1 本研究における社会認識のとらえ方



4



4 感想

まず1コマ目に公開された高橋教諭による「追究！EU」の実践について、述べたいと思う。この授業実践では、入学して数か月の1年生の段階で個別最適な学びを実現する手立てとして、生徒の興味・関心に基づいて5つのEU加盟国(①原加盟国のオランダ、②途中加盟したルーマニア、③非加盟国のスイス、④加盟を希望するセルビア、⑤脱退したイギリス)の中から任意の国を選択し、授業者が作成した詳細な資料をもとに、EU拡大の是非について考察し、Googleスライドにまとめる学習活動を設定した。また、各自が作成している途中のスライドに、高橋教諭がコメントを記入して追究が深まるように、指導の個別化の視点からの手立ても設定した。さらに、異なる国を調べている生徒で3人～4人組のグループを編成し、各生徒が調べた内容を発表で共有したうえで、(EUの拡大について、ヨーロッパ全体の安全や繁栄につながるか、つながらないか、どちらもいえないのか)という3つの視点で協働で考察し、Yチャートにまとめるという学習活動を設定した。これらの手立てによって、各生徒が主体的にEUの拡大の是非について追究し、スライドにまとめている姿がみられた。また、グループでの発表を行うことで、自身が調べた国以外の視点から考えた意見を知ることができ、Yチャートにまとめるという学習活動を通じて、自身の意見と他者の意見を比較・検討する場面を作ることができていた。一方で課題として、「生徒の興味・関心を優先した結果、ルーマニアやセルビアなど、ヨーロッパの中でも比較的マイナーな国を選択して追究を行う生徒が少なくなってしまったこと」、「その対応として高橋教諭は違うクラスの生徒が作成したスライドを紹介したが、短時間で教師が説明したので、どの程度生徒達が次の時間に検討する際に考えられるのか疑問であること」、「50分という短い時間の中でYチャートにまとめるところまで学習活動を設定しているので、内容を詰め込みすぎで一部生徒が授業についていけないこと」、「原加盟国の例としてオランダを追究させたが、教師の主観で設定したものであり、なぜフランスやドイツではいけなかったのかを高橋教諭本人が説明できなかったこと」等が見受けられると感じた。授業の実践自体は非常に示唆に富むものであったので、上記の課題を克服できるように単元・授業づくりを行うことができれば、公立中学校でも十分に参考になるものであると感じた。

次に2コマ目に公開された河西教諭による「モダンクエスト～過ぎ去りし時を求めて～」の実践について、述べたいと思う。まず、この授業実践では、始めの1時間目で近代から現代の歴史について教師の説明を聴いた後に、年表にまとめる学習活動を行うことで、歴史的事象や歴史の流れについて大まかに掴むという単元構成であった。そして、近代の特色について復習として授業の導入で確認した後、近代から現代への転換点として挙げられる代表的な学説を4つ(①第1次世界大戦が終結した1919年、②第2次世界大戦が終結した1945年、③アフリカ諸国が欧米の国々からの独立を果たした1960年、④冷戦が終結した1990年)を紹介し、生徒が自身の考えと最も近い説を選択し、教科書・資料集・インターネット・河西教諭が用意した図書資料等を活用して、説得力のある理由を考えてワークシートに記入するという授業であった。なお、理由を考える際に、現代の特色・イメージについて先に考えさせてワークシートに記入することで、現代の大観も行うという学習活動も設定されていた。この授業実践では、個別最適な学びを実現する手立てとして、各生徒が自身の納得した説を選び、妥当性のある理由を各種資料をもとに追究しながら、自由に考察する学習活動を設定したことが挙げられる。個人で調べる時間と自由に調べる時間を分けているものの、どの資料を使って説を証明するのか、誰とグループを作り協働学習を行うのかも全て生徒自身が考えて行うので、授業の自由度が高く、各生徒が主体的に学習に取り組む姿がみられた。さらに級友と話し合いながら考察をすることで、自身の支持する説と他者の支持する説を比較・検討し、学習を深める場面を作ることができていた。また、支援を要する生徒については、河西教諭が机間巡視・指導を行い、適宜助言を行うことで、指導の個別化も図られていた。一方で課題として、「一部生徒が授業の内容から逸脱した事象について調べたり、話し合ったりする姿が見られたこと」が挙げられる。また、生徒がある程度、歴史的事象や流れについて理解しているからこそ、時間をかけて行えるものであり、公立中学校でそのまま真似て行うのは難しいものだと感じた。しかしながら、個別最適な学びを行いづらい歴史的分野において、非常に参考になる実践であり、大変勉強になった。

2つの授業実践とも、上記のような課題が見受けられたものの、研究テーマやその屋台骨になる理論、仮説を踏まえた上で、社会科における個別最適な学びを実現できていたので、今回勉強させていただいたことを活かして、今後の自身の実践に繋げていきたい。

令和6年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立助川中学校 教諭 木名瀬 遼

- 1 派遣期日 令和6年11月23日(土)
- 2 派遣先 明星学園小・中学校
所在地 〒181-0002 東京都三鷹市井の頭5丁目7-7
[明星学園中学校 公式ホームページ - 明星学園](#)
- 3 研修内容 研修会名：2024年度 明星学園小学校・中学校
研究主題：繋いでいくもの、創り上げていくもの

(1) 研究主題についての考え方

今年で、創立100周年を迎える明星学園では、創立以来、常に教育の「研究」と「実践」を大切にしてきた。我々教育者が重要視しなくてはならないのは、教育の「内容」と「方法」である。

「教育」の内容は、目の前の子どもたちの現状に即して考えるべきものであり、本校では、創立当初から子どもたちが主体的に思考できるように、その「方法」を考えてきた。「内容」と「方法」のどちらにおいても、“科学研究”が最も大切である。また、“科学研究”は実際に授業を行い、そこから課題を見いだすことによって深まるものであると考える。

今回の主題を基に、これまで実践してきた時代の流れに左右されない本質的な実践研究を見つめ直し、さらに磨きをかけることを目指していく。

(2) 時程について

受付	1校時	2校時	全体会	昼食	分科会
8:00～	小 8:50～9:35 中 8:45～9:35	小 9:50～10:35 中 9:45～10:35	10:50～12:30		13:30～16:30

(3) 全体会について

① 講演会の内容について

平田 オリザ氏による特別講演会が行われた。現代の教育の在り方、演劇とコミュニケーション能力の関係性についてご講話いただいた。

オリザ氏によると、私たちは、「他者とは、分かり合えることが難しい」時代に生きているため、現代の社会では、「分かり合う」ことは困難で、私たちが「分かり合えない」ということを前提として生きていく必要がある。その際に、異文化や他者への接触をフィクションの力を借りて疑似体験することができる、演劇的コミュニケーションが有効的であるとする。

加えて、「分かり合えない」場合は、自分と共感・共有できる部分を、「全て」ではなく、「部分的」に共感・共有できる箇所を探し、折り合いをつけていくことも必要であるという。

② 講演会に参加した感想

私は、講演会の中でオリザ氏が述べられた「『シンパシー(同情)』から『エンパシー(共感)』へ」という言葉が、大変印象に残っている。講演を聞く前、私はコミュニケーションと演劇の関係性について、あまり想像ができなかった。しかし、現代のコミュニケーション教育の実態と世界のコミュニケーション活動についての講話を聞いて、「演劇」こそが、コミュニケーションの原点ではないかと感じた。さらにメリットとして、相手との共有できる部分を見つけていくことによって、世間との折り合いをつける術を学ぶことができることも大きな利点であると感じた。今回の講演は、今後のコミュニケーション教育の可能性と「演劇」との関係性を学ぶ貴重な機会となった。

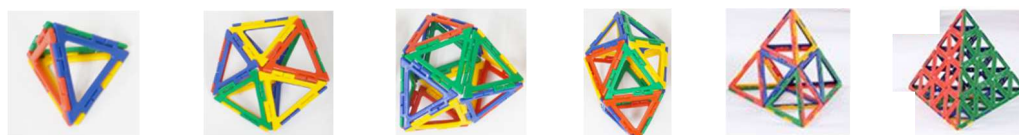
(4) 公開授業(視察内容)

① 8 学年 2 組 数学科「空間の図形」

本時の授業は、この単元の 1 時間目の内容であったため、導入では、本時の課題を明記せず、「空間の図形」に関する小学校の既習事項を復習する機会を設けていた。その際、実際に立方体や三角錐などの多面体を提示して、それぞれの多面体における辺や頂点の数について発問した。加えて、多面体をワークシートに書くよう指示し、机間指導の中で、凹多面体を書いた生徒のワークシートを全体で共有した。多面体には、凸多面体と凹多面体の 2 種類があることに気付かせた。その上で、本時の課題「合同な正三角形ピースを使って、全ての面が合同な三角形で凸多面体を、できるだけ多くの種類作りなさい。」を提示した。

生徒は個々に、正四面体や正八面体など、教科書によく見られる多面体を作っていたが、組み立てた多面体を周囲の友人と見せ合うことで、凹多面体を作ったり、面の数が多い複雑な多面体を作ることに挑戦したりする生徒が多く見られた。さらに、友人が組み立てたユーモアある立体物に対して驚きの声が上がったり、会話の中で一緒に組み立てたりするなど、意欲的に取り組むことができていた。

▽生徒が組み立てた立体物(イメージ)



② 7 学年 1 組 数学科「平面の図形」

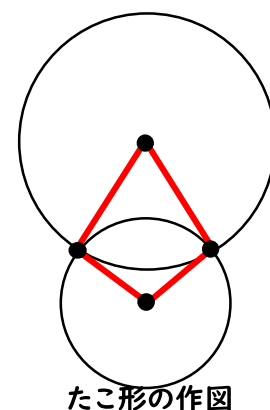
(I) 目標 作成した九角形の中にたこ形(隣り合った 2 本の辺の長さ等しい組が 2 組ある図形)があることから、線対称であると理解できる。

(II) 授業の様子

導入部分では、前回の内容であるコンパスによるたこ形の作図を行った。その際、生徒 2 名を指名し、前面のホワイトボードで作図するよう指示していた。これにより、たこ形の性質と作図の方法について再度確認し、安心して授業に臨める手立てが施されていた。

展開では円を描き、4 つの手順(円周上に 9 つの点を取り、九角形をかく操作)を 1 つずつ提示しながら、一斉指導で進めていた。指示をするだけでなく、教師が実際にホワイトボードに作図することで、生徒がコンパスや定規などの操作を確認しながら進めることができた。また、途中で円の大きさや点の位置を指示する際に、「自由に」という言葉を使っていた。その際、イメージがもてない生徒に対して、生徒自身がホワイトボードに作図途中の図に書き足すことで、生徒全員が見通しをもって作図することができていた。

作図した図形は、コミュニケーション・アプリ(MetaMoji Share)を活用して、クラス全体で共有した。その際に、共通点について全体に発問して、次時の授業へと興味・関心がつなげられるような工夫がされていた。



たこ形の作図

(5) 感想

今回の明星学園小学校・中学校の公開研究会に参加して、ICT 活用の可能性と規律性を尊重する教育について、深く考えることができた。その中でも、ipad の活用については、その操作性の高さに加えて、撮影した写真にタッチペンで自分の考えを記入したり、説明をしながら図形に書き加えたりするなど、表現の工夫を見ることができ大変参考になった。今後は、ICT を活用した授業実践に熱心に取り組む、生徒が課題に対して興味・関心をもてるような授業を目指していく。

- 1 派遣期日 令和6年10月24日(木) ～ 10月25日(金)
- 2 派遣先 学校名 我孫子市立我孫子中学校
所在地 千葉県我孫子市高野山537
<http://schit.net/abiko/abk-jh/>

3 研修内容

(1) 全体会

『生活や技術を工夫し創造する実践的な態度の育成～主体的・対話的で深い学びを通して～』と『「つながり」を深め、資質・能力を育む技術・家庭科教育～問題解決的な学習を取り入れた授業改善を通して～』の二つの研究発表が行われた後、文部科学省の教科調査官による指導講評が行われた。

ア 発表者より

生活や技術を工夫し創造する実践的な態度を育成するためには、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させることと学びの自立が重要である。個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させることにおいては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の特徴を踏まえて、効果的な指導となるように計画する。主体的・対話的な学びが求められるようになり、ペア学習やグループ学習を取り入れた授業が増えたが、協働的な学習が行われていることに意味があるわけではない。協働的な学習には、分からないことを友達に質問しやすいという支援的な意味や集団の中で役割を担うことによる自己存在の向上、短時間で多くの情報を集めることができるという効果がある。これを指導者が理解し、目的をもって協働的な学習を行う必要がある。学びの自立においては、学習者が主体となるような学習支援を行う。特に、「問う力」と「自己調整力」を育成する必要がある。問題解決的な学習では、問題解決・課題設定を行うことで「問う力」を育成し、実践を評価・改善することで「自己調整力」を育成することができると考えられる。手立てとしては、授業者が問いを工夫したり、問題発見・課題設定しやすい環境を整備することで課題を設定する力を育成したり、一枚ポートフォリオで振り返りから自己調整につなげたりすることが考えられる。また、一目で学習の全体が把握できる一枚ポートフォリオは生徒のモチベーションを持続させ、粘り強い取り組みにつながる。問題解決的な学習では、生徒から「できるようになりたい」という気持ちを引き出し、常に問題の解決を意識させ、振り返りを用いて解決に向かっていくことを自覚させることが大切である。

イ 千葉県の取り組み

「授業のデザイン活用BOOK」を作成し、県全体で生徒が自分の力で問題を解決できるようになること(学びの自立)を目指している。「授業のデザイン活用BOOK」とは、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」「問う力」「自己調整力」等をキーワードに、授業改善のポイントとして設定した「10の授業デザイン」の解説等をまとめた冊子である。本大会では「活用BOOK」を参考とした実践例もいくつか紹介された。今後は、さらに手軽に活用できるように継続した研究に取り組む模様である。

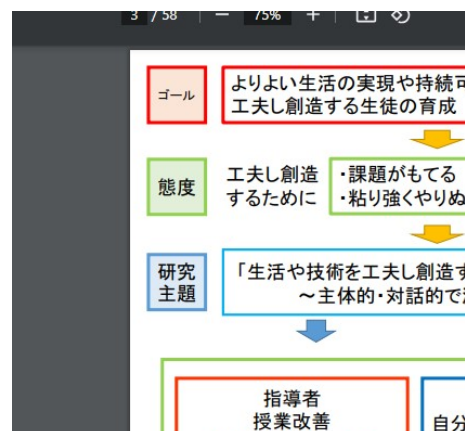


図1 目指す生徒の姿と実現するためのイメージ

(2) 分科会 (第4分科会 D情報の技術)

『双方向で楽しめるゲーム制作』の公開授業を参観した。公開授業は、高齢者や幼児向けの双方向でプレイすることができるゲームをペアで制作する内容だった。中学1年生だが、どのペアもゲームを制作することができていた。生徒たちは「プログラミングヒントカード」を参考にすることで自分たちの力でプログラムを組むことができていたようだった。

た。この授業の工夫されている点の一つは、目的が高齢者や幼児向けのゲームを作るという点である。高齢者や幼児は高度な操作が求められるゲームを行うことが難しいため、生徒たちが制作するゲームも高度なプログラムを要求されにくくなる。よって、プログラミングに慣れていない生徒でもゲームを制作することができた様子だった。また、家庭科（家族・家庭と子どもの成長）の学習と連携を図ることができる。発表者の先生は実際に、生徒が制作したコンテンツを幼児に体験してもらったこともあると説明していた。

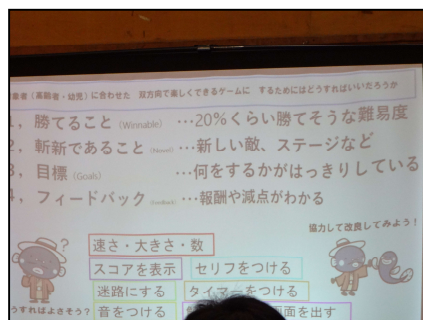


図2 本時の課題とそれを達成するためのポイント



図3 「プログラミングヒントカード」を参考にゲームを作る生徒

その後、3つの提案発表と指導助言があった。その中の一つに『「つながり」を深め、資質・能力を育む技術・家庭科教育』という提案があった。まず、近年は小学校からプログラミングを取り入れた学習が行われており、高校でも情報を学習するため、小中高の学習のつながりを考えるとよいとのことであった。また、教材を選定する際に地域とのつながりは重要であると、次のような内容の話があった。「その地域で多く取り扱われている教材は、実践事例やワークシートが多く紹介されていることが多く、授業を行いやすい。また、高価な教材で購入が難しい場合でも、近隣の高校や大学、公共機関から貸してもらうなど、地域とつながって教材をシェアすることも考えられる。しかし、最も重要なことは中学生が問題解決をするために適している教材を選ぶことであり、資質・能力を育成するためにどの教材を使用するか考えるべきである。さらに、日常生活と授業がつながるように、教師は学校教育目標とのつながり、人と人、地域や社会とのつながり、指導と評価のつながりを意図的に仕組み、生徒がICTを活用したつながりや他者や社会とのつながり、学習内容とのつながりを考えるように授業を作っていくことが大切である」とのことであった。

その後、3つの提案発表と指導助言があった。その中の一つに『「つながり」を深め、資質・能力を育む技術・家庭科教育』という提案があった。まず、近年は小学校からプログラミングを取り入れた学習が行われており、高校でも情報を学習するため、小中高の学習のつながりを考えるとよいとのことであった。また、教材を選定する際に地域とのつながりは重要であると、次のような内容の話があった。「その地域で多く取り扱われている教材は、実践事例やワークシートが多く紹介されていることが多く、授業を行いやすい。また、高価な教材で購入が難しい場合でも、近隣の高校や大学、公共機関から貸してもらうなど、地域とつながって教材をシェアすることも考えられる。しかし、最も重要なことは中学生が問題解決をするために適している教材を選ぶことであり、資質・能力を育成するためにどの教材を使用するか考えるべきである。さらに、日常生活と授業がつながるように、教師は学校教育目標とのつながり、人と人、地域や社会とのつながり、指導と評価のつながりを意図的に仕組み、生徒がICTを活用したつながりや他者や社会とのつながり、学習内容とのつながりを考えるように授業を作っていくことが大切である」とのことであった。

4 感想

千葉大会では『生活や技術を工夫し創造する実践的な態度の育成～主体的・対話的で深い学びを通して～』を主題としており、生活や社会と技術科の学習のつながりに気付かせたいと考えていたので、とても興味深いものであった。1日目の全体会では、技術分野の研究発表だけでなく、家庭分野の研究発表と教科調査官による指導講評を聞くことができた。今まで、技術分野の指導について考えたり、話を聞いたりする機会はあったが、家庭分野の指導について学ぶ機会はほとんどなかった。技術科と家庭科は一つの教科として扱われていることを考えると、技術分野と家庭分野の両方の特徴を知り、違いを理解するとよりよい指導ができるかもしれないと感じた。研究発表では、実践的な態度を育成するためには、特に「問う力」と「自己調整力」を育成する必要があるとあり、問題解決的な学習の中で育成することができるという話があった。問題解決を行う際に、「できるようになりたい、成長したい」と生徒に必要感を抱かせることがポイントであると知った。教師は生徒に「教えたい」「覚えてほしい」という気持ちを抱いてしまうことが多いが、教師に求められて学習するよりも、生徒自らが必要性を感じて学習する方が資質・能力を高めることができると考えられるため、生徒が学習の必要性を感じるような手立てを考えていくことが大切である。また、主体的・対話的で深い学びにつながる「個別最適な学び」と「協働的な学び」は、それぞれの活動方法の良さを授業者が理解した上で授業をつくることが重要であると分かった。私は、授業の中でグループ学習を行うことが多いが、グループ学習を設定した目的が明確でないことがあると気付いた。これからは、なんのためにその学習方法を選択しているのか考え、生徒の学習効果ができるだけ高くなるように授業を作りたい。

今行っている実践をすぐに大きく変えることは難しいが、学んだことの中から取り入れられることを少しずつ導入し、より良い授業ができるように研修していきたい。

- 1 派遣期日 令和6年12月8日(日)
- 2 研修先 学校名 筑波大学附属駒場中・高等学校
所在地 東京都文京区大塚3-29-1
<https://www.komaba-s.tsukuba.ac.jp>
- 3 研修内容 筑波大学公開講座
テーマ 数学科教員研修会 教材開発ワークショッププログラム

(1) 公開模擬授業① 筑波大学付属駒場中・高等学校 須藤雄生先生

場合の数 分割数の数え上げ

問題 自然数 n を、 n 以下の自然数の和の形に“分割”することを考えます。ただし、「 n 」(分割しない)も1通りと数え、分割した際の和の順序は区別しません。

例えば、 $n=3$ については 3 , $2+1$, $1+1+1$ の3通りの分割があります。このとき、 $1+2$ は $2+1$ と同じとみなし、2とおりでではなく1とおりと数えます。

- 1) $n=4$ のときの分割をすべて列挙しなさい。
- 2) $n=5$ のときの分割は何とおりありますか。
- 3) $n=6$ のときの分割は何とおりありますか。
- 4) $n=10$ のときの分割は何とおりありますか。

全部で何通りあるかを数える場合においては、先頭の数字が大きい順に並べたり、項が少ない順に並べたりと、数え間違わない工夫を決めさせることが大切であった。

(2) 公開模擬授業② 数と式 因数分解パズル 筑波大学付属駒場中・高等学校 薄井裕樹先生

問題1 縦横それぞれで因数分解できるように、各□の中に正の整数を1つずつ入れてみましょう。

$$\begin{array}{c} \begin{array}{c} \text{横} \\ x^2 - \square x + 15 = (x - \square)(x - \square) \\ \text{縦} \\ x^2 - \square x + 14 = (x - \square)(x - \square) \end{array} \end{array}$$

$$\begin{array}{c} \begin{array}{c} \text{横} \\ x^2 - 7x - 18 = (x + \square)(x - \square) \\ \text{縦} \\ x^2 + \square x + \square = (x + \square)(x + \square) \end{array} \end{array}$$

問題2 次の式が成立するように、各□の中に1~9の整数いずれか1つを入れましょう。ただし、同じ数は1回のみ使えるものとします(答えは複数あるかもしれません)。

$$x^2 - \square x - \square\square = (x + \square)(x - \square\square)$$

中学生に対しては、単なるドリル形式の計算練習ではなく、いかに楽しみながら因数分解を考えるかを大切にしているため、パズル形式で出題している。問題2では、解答が複数あるが、あえて数を伝えないことで、繰り返し解答を見付けることに取り組むよう工夫している。実際に授業では、おいしい解答にたどり着くと、そのそばに解答があるかもしれないと、解答にたどり着こうとする意欲につながっていたと報告があった。

(3) 全体会 参加校教員による授業事例共有および開発教材紹介

① 筑波大学付属駒場中・高等学校 三井田裕樹先生

高等部の幾何学の授業において、1934年の東京帝国大学医学部試験の「放物線の軸を作図」の問題を出題した話をした。また、大学生は高等学校で学習する統計学と微分方程式が特に大切と感じているので、中学1年生から、そこを意識して指導することが大切だと話をした。

② 広尾学園中学校高等学校 外丸隆央先生・安田真由美先生

広尾学園中学校高等学校では、中学1年生から高校3年生までの6年間で、一つのテーマについて研究し発表する、医進・サイエンスコースの授業がある。今回は、Q-1プロジェクトに出演した現象数理チームをモデルに紹介をした。

③ 芝浦工業大学柏中学高等学校 笠尾俊輔先生

学校独自で授業を設定している「SS 数学」についての話をした。各授業コンテンツは、3～4回の完結授業で、週1回授業を実施している。今回は、6月に実施した立方体の展開図の紹介をした。立方体の展開図は全部で何種類あるかについて考え、レポートにまとめ発表していた。

④ 大阪府立四條畷高等学校 藤板侑司先生

週に1時間、希望者による課外授業の形で実施している、数学オリンピック予選突破に向けた取組や、その類似問題を用いた公開授業の内容を紹介していた。公開授業では、保護者の方々も参加して問題に取り組み、年齢問わず一緒になって問題を解決していたようだ。

⑤ 新潟県立新潟高等学校 佐藤喜昭先生

曲線 $f(x) = x^3 - 5x^2 + 5x + 8$ とその曲線上の点(3, 5)における接線で囲まれた図形の面積 S を求める授業を紹介した。そもそも接線とはなんなのか。なぜ接点で2重解になるのかを考えさせ、微分の必要性について話をされた。

⑥ 筑波大学付属駒場中・高等学校 副校長 町田多加志先生

教材開発のきっかけとして、日々の授業での生徒の発表や生徒や教育実習生との会話、自分の中の疑問などをヒントにして開発しているとのこと。また、積極的に公開講座に参加した話もしていた。そのような授業では、授業者も生徒が興味関心をもつよう課題を工夫しているからだそうだ。

4 感想

午前の公開模擬授業では、実際に生徒の立場になって問題に取り組むことで、授業者が生徒に対して、どんな資質能力を付けさせたいか。また、そのためにはどんな教材にすればよいか。その中で、どんな工夫をして、どのように興味関心をもたせているかを感じることができた。午後の全体会では、他の学校の取組をいろいろ聞くことができた。高校生を対象とした授業が多かったため、とても高度な内容だったが、多様な意見を聞くことで今後の教材開発のためのヒントを得ることができ、とてもよい研修会となった。

- 1 派遣期日 令和6年11月23日（土）
- 2 派遣先 学校名（会場名）大洗町立大洗南中学校
所在地 茨城県東茨城郡大洗町大貫町 1212-4
<https://www.minami-j.oarai.ed.jp/>

3 研修内容
(1) 研究主題

国語科における教科教室型を生かした協同的な学習の方法

大洗町立南中学校（以下、南中学校）は、教科教室型の校舎の造りを生かした教育実践活動を続けて25年目、実践研究発表会は19回目を迎えている。平成28年からは南中敷地内に開校した大洗南小学校との連携し9年間の学びをつなぐ実践を行っている。教科教室型の校舎を生かした教育活動は、同じ環境下で生活をしてなければ、よさや悩みの共有が難しいと常日頃感じている。駒王中学校の教科教室型のよさを十分に活用できていないというもどかしさのもと、本研究課題を設定し研修を行うこととした。

(2) 令和6年度南中学校研究課題に関する全体会

令和6年度の南中学校研究課題は「『対話』から新たな価値を創る－教科や学校の枠を越えた学びのデザインを通して－」である。研究主題にある「対話」とは、課題との対話、自分との対話、仲間との対話の3つの対話を指しており、南中学校ではこれらの対話の充実を図った学習活動に努めている。特に、仲間との対話については、共に授業を受ける仲間のみを指すのではなく、地域の住民や地域施設で働く人々なども含んでいる。急速に変化する社会の中で生きる生徒に求められるものは、確かな学力のみならず、他者と協働して課題を解決することや情報を見極める力、情報の再構成し新たな価値を見出す力など多岐に渡るからである。それらの力を育むために南中学校では学校の外へも目を向けた「対話」を柱とした研究課題を設定している。

(3) 教科別研修

① 国語科における「新たな価値を創る」生徒の姿について

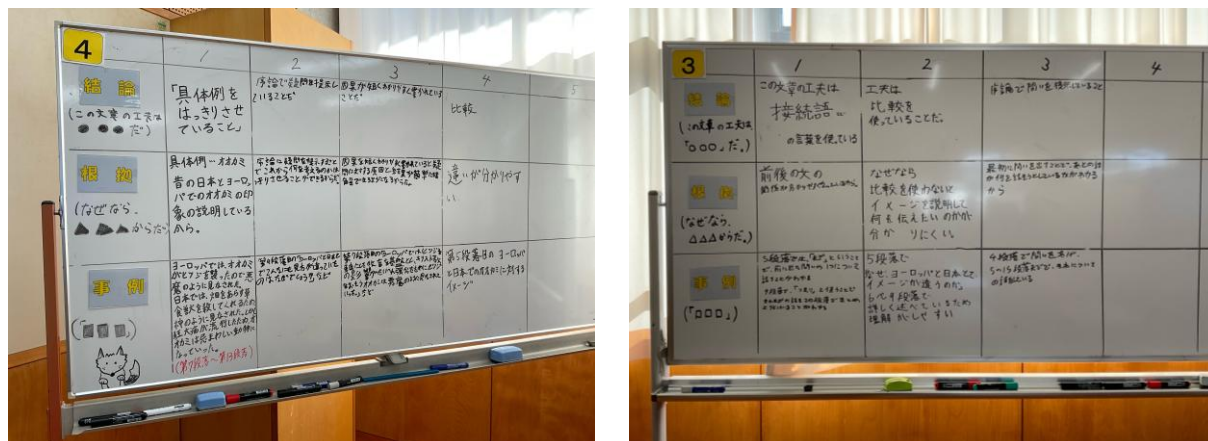
南中学校では、3か年計画での研究を進めており、本年はその2年目にあたる。国語科では、「予測困難な社会の変化に向き合うために、生徒が主体的に言葉への自覚を高め、よりよい社会の創造に貢献できる資質・能力を身につけること」を新たな価値を創る生徒の姿と位置づけている。2年目にあたる本年は、「言葉への自覚を高めるために、情報同士の関係を分かりやすく整理し、根拠の適切さを吟味して自分の考えを表現することができる」ことを目標にしており、説明文やプレゼンテーションでの学習に重きを置いている印象であった。

② 公開授業見学－1年生「オオカミを見る目」

公開授業では、1年生「オオカミを見る目」の第4次、7時間目を見学した。前時までに、情報を整理する学習を終えており、本時は「「オオカミを見る目」の文章はどうして分かりやすいのか解明せよ」という課題であった。「オオカミを見る目」は分かりやすい文章構成と展開で、文章読解に難しさはあまり感じないというのが私の印象である。だからこそ、基本の論理展開や原因と結果、考えと根拠など情報と情報の関係について整理しながら考えるには扱い易い文章でもある。

生徒は4人ずつの8グループに分かれ、各々が気付いた文章に表れている分かりやす

さの工夫について共有をする。共有する際にはホワイトボードを活用していた。（国語科で活用できる専用のホワイトボードが8枚もあり、充実した環境が大変羨ましい）下記の資料は、グループで表に整理したものである。



資料

表は、見つけた工夫について、結論・根拠・事例に整理する項目がある。各々が見つけた工夫について、前述の3点に分けて整理していくことで、自身の思考を整理しながら、文章中の情報も整理することを目的にしていると感じた。グループでの情報共有の流れが生徒に定着しているため、各班とも時間いっぱい情報共有を行っていた。また、教科教室型のオープンスペースや隣接する教室に分かれてのグループ活動であるため、隣のグループと適度に距離があり、話合いに集中できている様子であった。

表に整理された情報には、2通りの書き方が見受けられ、興味深かった。1つ目は、利点を根拠にあげ、結論を述べているパターンである。「序論で問を提示している。なぜなら最初に問を出すことで、何の話をしようとしているか分かるから」というものだ。もうひとつは、「工夫は、比較を使っていることだ。なぜなら比較を使わないとイメージを説明しても何を伝えたいの分かりにくいから」という読者の誤った読みを最小限に抑えるための工夫という点に着目した書き方だ。どちらの記述をした生徒もやや言葉足らずではあるものの、説明文に詰め込まれた情報を少しずつ分解しながら、情報同士の関係についてじっくりと考えていた。各々の頭の中を整理している様子が表に書かれた言葉に表れていたと感じる。本時はグループでの共有にとどまり、次時では全体での共有が行われる。それまで本時で活用した8枚のホワイトボードはオープンスペースに保管されるそう。授業を終えても、オープンスペースのホワイトボードを目にする度に生徒それぞれに思考の整理が続くのだろう。このあたりも、オープンスペースの効果的な活用のヒントになっている気がする。

4 教科別研修会・授業者と語る会を通して得た、オープンスペース活用の手掛かり

教科教室型システムについて、南中学校では「教科独自の学習環境や多様な指導方法に対応可能な空間」と捉えている。この捉え方に触れ、私は生徒の学習環境や教科独自の空間をどのように独創的に作り上げるのか、という点にばかり囚われていたことに気付いた。教科教室型は、教師の多様な指導方法を実験、模索するに最適な空間という考え方もあるのだ。

公開授業後の授業者と語る会において、授業者の稲田先生とお話をさせていただいた。稲田先生もオープンスペースの活用については試行錯誤をしているとのことであった。国語科においては、プレゼンテーションの単元で個人のリハーサルのスペースを設け、空間の使い方を工夫したり、グループでの話合いや共有を繰り返し行う際にグループ同士の距離を十分に保ったりするなど、生徒が集中して課題に向き合う空間づくり等の取組みは自校でも実践可能な内容に思われた。教科教室型を利用した実践を模索するのではなく、教科教室型は独創的であったり斬新であったりする授業に挑戦しやすい環境と捉えて活用する姿勢で授業を模索することがよいのではと気付かされた研修であった。

- 1 派遣期日 令和6年11月22日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名） 中野区立中野東中学校
所在地 東京都中野区中央 1-41-4
<http://nk-nakanohigashi-j.la.coocan.jp/>
- 3 研修内容

東京都指導教諭による模範授業

中学1年 英語

Program 7 “Research on Australia” *Sunshine English Course 1*(開隆堂)

（1） 中野東中学校英語科の授業について

中野東中学校では、東京方式少人数・習熟度別ガイドライン（改訂版）に従い、習熟度の程度を考慮した少人数集団を編成し授業を行っている。英語の習熟レベルが上位・中位・下位の生徒をおおむね均等に混在するように編制している。そうすることで、上位層がリーダーとして、機能したグループワークにより生き生きとした言語活動が展開され、個々の生徒の発話量を増やし、コミュニケーション能力を効果的に向上させることを目標としている。

（2） 見学した模範授業について

本研修で参観した授業の単元では、中学校学習指導要領（平成29年告示）第2章 英語「第2 各言語の目標及び内容等」の「英語 1目標（5）書くこと」の「イ 日常的话题について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができるようになる。」ことを目標に指導を行っていた。本時では、新しい言語材料について指導をする時間であったが、「書くこと」に焦点を当てつつ、教師と生徒とのやりとりでターゲットセンテンスを理解させ、グループワークによる言語活動を中心にパターンプラクティスを取り入れながら、新しい言語材料の表現を定着させる授業を展開していた。

（3） 授業を組み立てる際のポイント

① コミュニケーションの目的・場面・状況を明確に設定する。

「書くこと」に焦点を当てた今回の単元では、「外国人の友達を送ってきた『冬休みに3日間の海外旅行をするのにおすすめの場所を教えてください』という内容のメールへの返信を書く」という場面を設定していた。単元を通して、様々な場面設定を生徒に提示し続け、単元末に実際にライティング活動をさせ、まとまりのある文章を書かせるということだった。

② 単元のゴールに向けて、単元を通して指導する。

以下の点に留意し、単元の目標を達成できるよう、計画的・段階的に指導を行う。

- a 単元内の各授業はトピックを一貫する。
- b 単元内の各授業でゴールに向けて様々な表現を毎回指導する。
- c 単元の前半では、進出言語材料の指導を行う。基本的な表現を確実に身に付けさせることができるよう、言語活動を通して知識・技能を活用させ、その定着を図る。
- d 単元の各授業で「書くこと」の活動を行う。Controlled Writing から Free Writing へ、トピックや難易度を変えながら、繰り返し書かせることで「書くこと」の技能を高められるようにする。

○Writing の指導の流れ

- ・第1時：Controlled Writing(モデルの構成を参考に書く。)
- ・第2時：Controlled Writing(第1時で書いた文章に指示された情報を追記する。)
- ・第3時：Controlled / Free Writing(教科書の本文を参考に書く。自分で情報を付け加える。)
- ・第4時：Controlled / Free Writing(教科書の本文を参考に書く。自分で情報を付け加える。)
- ・第5～6時：Free Writing(言語面・内容面ともに自分で考えて書く。)

③ 言語活動を通して指導する。

指導は3年間の見通しをもち、段階的・計画的に行う。授業は言語活動を中心にデザインし、言語活動に取り組みながら知識・技能を活用させ、その定着を図るとともに、思考力・判断力・表現力を育成する。言語活動を行うにあたっては、以下の点に留意する。

○音声による練習を十分に行い、表現に慣れさせたあとで、「読むこと」や「書くこと」の言語活動に取り組みさせる。

○練習や言語活動は生徒にとって自分と関わりなる内容となるようにし、言語使用を「自分ごと」にさせる工夫をすることで、生徒の学習への興味・関心を高めるようにする。

④ 小中連携の視点をもち指導する。

生徒たちが小学校で学んだ表現を活用したり、スピーチなどの経験をいかしたりして、学びをつなげ、発展させていくことが大切である。

4 感想

帯活動からまとめまで一貫性のある授業が展開されていた。帯活動では、生徒がタブレット端末を使用し、単語練習を与えられた時間で行うことが定着されており、それが書く活動においてもいかされていた。繰り返し学習する大切さを改めて実感した。また、グループワークを多く取り入れることで言語活動が活発になり生徒の発話量が多く、受け身の授業ではないので、生徒は意欲的に活動する姿が多くみられた。

単元を通して最後のゴールに向けて計画的に授業が組み立てることで、ターゲットとなる言語材料の定着を図るとともに、知識・技能だけではなく思考力・判断力・表現力の向上にもつながることを改めて学ぶことができた。

- 1 派遣期日 令和6年10月10日（木）～10月11日（金）
- 2 派遣先 〈中学校部会〉旭川市大雪クリスタルホール 旭川市神楽3条7丁目
〈全体会〉旭川市民文化会館 旭川市7条通9丁目
- 3 研修内容 令和6年度 全日本音楽教育研究会全国大会（合同大会）
第66回北海道音楽教育研究大会旭川上川大会 <https://www.jsme.net/>

大会主題 音とつながる 心がつながる 学びがつながる
中学校部会主題 ～広げよう音楽との関わり方 深めよう音楽への思いや音楽表現～

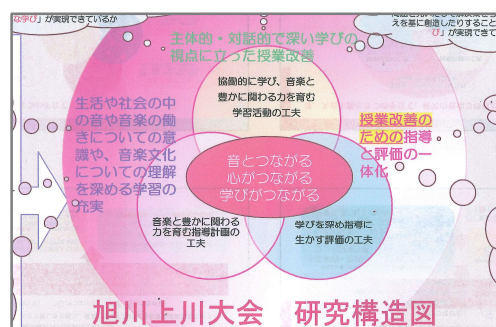
(1) 大会主題・研究内容について

① 大会主題について

音とつながる …自ら音や音楽に関わり、音や音楽の魅力を感じ取ったり、自分の考えをもって音楽と向き合ったりするなど、豊かに音楽と関わる力が育成されることを願うもの

心がつながる …仲間を大切にしながら学び合い、音楽活動を楽しむ豊かな心が育成されることを願うもの

学びがつながる…学校内外における様々な音楽活動を通して、幅広い音楽に触れ、学びを生かそうとする豊かな心が育成されることを願うもの



② 研究内容及び手立て

- 音楽と豊かに関わる力を育む指導計画の工夫（※抜粋）
 - ・題材で扱う〔共通事項〕を適切に位置付けた指導計画の工夫
 - ・我が国や郷土の音楽に親しみ、よさを味わわせる段階的な指導計画の工夫
- 協働的に学び、音楽と豊かに関わる力を育む学習活動の工夫（※抜粋）
 - ・思いや意図・表現意図に合った表現や発想を生かした表現を実現するために必要な技能を習得する学習活動の工夫
- 学びを深め指導に生かす評価の工夫（※抜粋）
 - ・学習場面に応じて的確に評価できる場面と具体的な姿を明確にした評価の工夫

(2) 公開授業・研究協議

歌唱 第1学年 「ソーラン節の魅力味わいながら歌おう」 「ソーラン節」（北海道民謡） 指導者：旭川市立永山南中学校 木原 晶子先生
--

① 研究との関わり

【目指す生徒像】 「ソーラン節」のイメージに合う表現について思いや意図をもち、歌唱表現を創意工夫する生徒

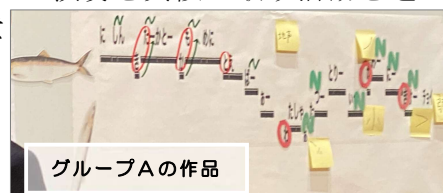
【指導計画の工夫】 創意工夫を生かした表現で「ソーラン節」を一人で歌うことができる技能を身に付けるために、1・2時間目で仲間とともに歌い試した活動を生かし、思いや意図をもって歌うことができるような計画となっていた。

【学習活動の工夫】 自分の考えをグループの仲間と共有し、仲間とともに様々な歌い試したり、他グループの演奏を聴いたり、他グループの演奏を真似て歌う活動を通して、「ソーラン節」のイメージに合う自分の思いや意図を確かなものにしていけるよう工夫がされていた。

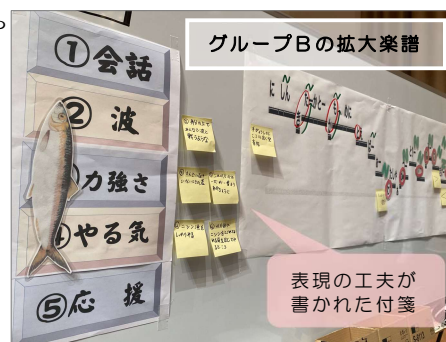
② 授業の実際

【本時の展開】※抜粋

- 「ソーラン節」の一節の歌唱表現を創意工夫する。



- ・「にしんきたかとかもめにとえば」の表現（発声や発音、コブシの入れ方）の工夫について全体で共有する。
- ・はっきり発音する言葉やコブシの入れ方について知り、実際に歌ってみる。
- ・「わたしゃたつとりなみにきけチョイ」のイメージに合う歌い方の工夫を個人で考えた後、グループ内で共有し様々に歌い試す。



○各グループの表現の工夫を共有する。

- ・工夫した点の発表を聞いたり、工夫箇所を歌い比べたり、全員で真似たりするなどして、学級全体で工夫の内容を共有する。
- ・発表を聴く人たちは、囃子詞を入れたり、手拍子を打ったりする。

【授業の様子】

- ・表現の工夫として「あり」か「なし」かを、自分たちで歌ってみたうえで考え選択していた。また、手拍子が民謡の表現に合うように手もみになっており、民謡の特徴やよさが生徒に浸透していることが見て分かった。

創作 第2学年 「反復や変化を生かしてリズム・パターンをつくろう」
「オーラ・リー」（プールトン作曲）指導者：下川町立下川中学校 熊澤 直行先生

① 研究との関わり

【目指す生徒像】 創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、まとものある創作表現を創意工夫する生徒

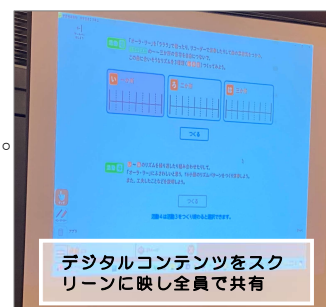
【指導計画の工夫】 音のつながり方によって生じる音楽の雰囲気の違いを感じ取り、ICT端末の再生機能を活用して「オーラ・リー」の曲想にふさわしいと思うリズム・パターンを試行錯誤しながら選択し、組み合わせる流れとなるよう指導計画を工夫していた。

【学習活動の工夫】 他者の作品を聴いて自分の作品と比較し、練り直す機会を適宜用意することで、創作意欲を喚起したり、互いの作品のよさを共感・共有し、深めたりする活動を取り入れていた。

② 授業の実際

【本時の展開】※抜粋

- 全体の曲想にふさわしいと思うリズム・パターンをつくる。
- ・3つのリズムをデジタルコンテンツ上で組み合わせながら16小節のリズム・パターンをつくる。
- ・リズムの繰り返しや組み合わせ方を工夫した生徒の作品を鑑賞し、自分の作品と比較して作品づくりに生かす。



【授業の様子】

- ・「区切りがついてしまうからこのリズムを選んだ」という生徒の発言も見られ、「続く感じ」や「終わり」を意識して組み合わせを選択していることが分かった。

(3) 記念講演・記念演奏

演台 『子どもと合唱するということ』 作曲家・合唱指揮者 松下 耕氏

「信じる」など数々の名曲を生み出した松下耕先生の生い立ちや音楽との出会い、合唱曲の楽曲分析、合唱指導法についての話を聴講した。

4 感想

生徒の意見を丁寧に吸い上げ全体に共有したり、簡潔に課題やヒントを提示したりすることで、生徒の考えがさらに深まるということを改めて感じる事ができた。また、表現と鑑賞を効果的に関連させた指導計画の工夫により、学びの連続性が感じられ大変勉強になった。生徒が自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するのか、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するのか、学びの深まりをつくりだすためにどのように組み立てるのかという視点を持ち、これからも授業改善に努めていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年8月1日（木）
 - 2 派遣先 ビジョンセンター西新宿
所在地 東京都新宿区西新宿1-22-2 新宿サンエービル7階、3階
<https://www.visioncenter.jp/nishishinjuku/floor/>
 - 3 研修内容
第75回関東甲信越静学校保健大会
テーマ「一人一人のウェルビーイングの実現に向けた豊かで健やかな心身の育成」
 - (1) 開会式
 - (2) 特別講演
「相撲部屋の365日」鈴木 ゆか氏
(公益財団法人日本相撲協会 荒汐部屋 先代女将)
 - (3) 班別協議
第1班 学校経営と学校保健
研究協議1 「児童・生徒の豊かな心とこれからの時代を生きる力をはぐくむ学校教育の一環として取り組む学校保健活動の在り方」
ー今特別支援学校の養護教諭に求められているものー
東京都立城南特別支援学校 養護教諭 笹渕 真子
研究協議2 9年間の発達段階に応じた健康教育の推進と心身ともに健康な児童生徒の育成
ー家庭や地域と連携した学校保健委員会の取組を通してー
群馬県桐生市立黒保根学園 養護教諭 竹内 順子
- 4 感想
 - (1) 特別講演について
相撲部屋は、年齢や出身、これまでの生きてきた環境が違う者同士が相撲という夢・目標のために共同生活をしてる。鈴木氏は、相撲は個人競技であるが、日常生活は集団生活のため協調性が大切であると話していた。一つ屋根の下で衣食住をともにするだけでも様々な困難があることは想像できるが、その中で伝統を重んじながらも今の時代にあった指導をし、プロ集団を育てることは悩みや困難が尽きないと感じた。その中で、鈴木氏は全部一人でやろうとしないことが大切であると語っていた。体の健康面に関しては、力士は無呼吸症候群が多いという。そのため、専門家に相談したり、任せたりして最終的に自己管理できるように育てているという。この点は、学校保健が目指すものと同じであり、共感することができた。メンタル面に関しては、様子をみて、察したら声を掛けることを心がけているという。普段、私たち養護教諭が行っていることと同じである。厳しい相撲の世界の中には、途中で夢を諦めセカンドキャリアに進まなければいけない者もいる。その際は、進路を一緒に考え、辞める前から資格や免許を取得できるようサポートしているという。相撲部屋と学校は全く違った世界のように感じていたが、人を育てる、生きる力を育成するということは共通しており、考えや対応は近いものがあると思った。今回の学びから子どもたちが夢や目標を持ち、たくましく生きていけるよう一人一人の心身に寄り添い、関係者との連携を大切にしながら保健室経営や健康教育を実践していきたい。
 - (2) 班別協議について
班別研究協議会では、第1班「教育目標の具現化を目指す学校保健」に参加した。

① 研究協議 1

東京都立城南特別支援学校の発表の中で、特別支援学校で勤務する養護教諭には学校保健だけでなく、特別支援教育の知識、医療・医学的知識、応急・救命できる力が必要だと話していた。そのために、養護教諭は新しい知識や技術を習得し、他職種や保護者との連携、初任者研修の充実や健康課題への研究が必要ということで対応策に取り組んでいるという。印象に残ったのは、保護者との連携の中で保護者のための性教育をPTA主催で開催し、保護者の不安や悩みを共感したという取組だった。講演会の後半には、小・中・高等部で行ったグループワークの話があった。性に関する内容は知りたいけれど人に聞くことをためらう内容だが、そのような場を設定してもらうことで保護者は悩みや不安などを共有することができ、つながりも作ることができる。また、このような場を設けることで養護教諭自身も健康課題への学びや研究を深めることができると思った。発表者の先生自身もやってみることが大切と話しており、自己研鑽や研修を重ね、発信していくことの重要性を改めて実感した。

② 研究協議 2

桐生市立黒保根学園の発表では、小中一貫教育校という特徴を生かした学校保健委員会と健康課題の解決に向けた取組の発表だった。学校保健委員会には、5～9年生の児童生徒も組織メンバーに含まれており、学校保健委員会内で提示される自身の健康課題について直接話を聞けるため、自分事として捉えるいい機会になると感じた。性教育講演会やがん教育など外部講師を招く講演会も学校保健委員会の一部として関係者に参加してもらっているという。家庭・地域・学校が連携する機会となり、健康教育の推進につながると感じた。発表者の先生は児童生徒に行っている生活習慣のアンケート結果から自校の健康課題を把握し、保健だより等で結果を発信している。そして、健康課題を解決するための対策を実施し、その成果も家庭に発信している。子どもの健康課題は学校だけでは解決しないと指導があったように、成果を見える化し、家庭や関係機関に発信することの重要性を感じた。

③ 指導助言

子どもたちの健康課題は、社会変化と強く結びついており、深刻化・多様化しているのが現状である。地域や校種によって異なる児童生徒の健康課題を教育に限らず福祉、公衆衛生、他の行政と連携して、解決に向けた対策を講じることが大切であることを改めて理解した。教育目標の具現化を目指した学校保健は、「学校教育目標を読み込む」「自校の実態や課題を共有・提案をする」「重点的に取り組む内容を検討する」「そのための具体的な手立てを講ずる」「取組の成果を検証し、次年度に生かす」という指導を受けた。健康課題は、学校経営上での課題でもあり、危機管理の視点からも重要だと学んだため、保健室の中だけでの問題とするのではなく、学校全体で共有し、関係者・関係機関を連携することの重要性を改めて感じることができた。

(3) まとめ

今回、関東甲信越静学校保健大会に参加させていただき、自分自身の日々の実践を振り返り、見直す機会となった。今後の執務の中で、本校の保健室経営計画を見直し、学校教育全体を通して健康課題に対応することができるよう教員同士で課題を共有すること、積極的に対策を実践することに尽力していきたい。

- 1 派遣期日 令和 6 年 12 月 12 日（木）
- 2 派遣先 学校名（会場名） 長野県須坂市立東中学校
所在地 長野県須坂市亀倉 6-6
<http://www.azuma-school.ed.jp/>

3 研修内容

研究テーマ

目的意識をもって、粘り強く取り組む生徒の育成
 ・全教科で「単元内自由進度学習」の実践
 ・ICT の効果的な活用による、個別最適な学びと協働的な学びの一体化の実現

(1) 研究概要

須坂市立東中学校は、令和 5 年度より長野県教育委員会指定の「GIGA スクールとしての学びのパイオニア実践校」である。また、文部科学省指定の「リーディング DX スクール」に指定されている。今年度は、重点項目を「個別最適な学びと、協働的な学びを実現するために、各教科で『単元内自由進度学習』の実践。その中で ICT を効果的に活用し、成果を発信していく。」こととし、研究に取り組んでいる。これらについて実践を通して、見通しをもって追究したり、自分の力で解決していく子どもの姿を目指している。

(2) 公開授業

2 年生理科 単元名「電流と磁界」 授業者：小林 秀行先生

本単元は、コイルモーターが回るという事象が、磁石の磁界、電流による磁界、磁石＋電流による磁界から生まれる力など、いくつもの事象を見通しをもって観察・実験を行う単元である。授業者が目指す子どもの姿として、結果から分かることを比較したり、関係づけたりして、モーターが回り続けることを学び、さらに脱炭素社会に向けてモーターの消費電力を抑えるにはどうすればよいかについて自分の考えをもつことができる姿を目指したいとしていた。

〈公開授業の流れ〉

- 本単元の目標の確認
脱炭素社会に向けてモーターの消費電力を抑えるにはどうすればよいか
- 本時の課題の確認
 - ①磁石にはどのような力がはたらいているのだろうか
 - ②コイルに電流を流すとどうなるのだろうか
 - ③磁石の中に入れたコイルに電流を流すとどうなるのだろうか
 - ④コイルに電流を流す部分のしくみはどのようなになっているのだろうか
- 課題解決
- 定着問題

以上の目標、課題を解決していくために、生徒は、配付された学習の手引きに基づき、学習計画を立てて学習を進めていく。実験は課題 1～4 までのどの順番で取り組んでもよいという設定であった。

①単元内自由進度学習の授業構成と準備物

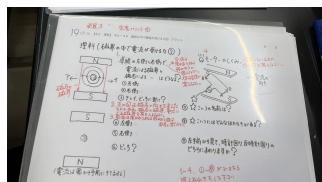
公開授業では、生徒が個人で自由に学習を進められるように学習の流れや様々な準備物が用意されていた。

〈授業の流れ〉

- 1) 生徒が取り組みたい課題を選択する。
- 2) 個人またはグループで課題に取り組む。
- 3) 観察・実験の結果を写真に撮り、共有ツールで全体に共有する。
- 4) 定着プリントに取り組む。（不正解の場合は再度課題を見直す。）
- 5) 振り返りに取り組む。
- 6) 進捗の記入

〈準備物〉

- ・生徒が扱いやすい授業者による自作教材
- ・実験道具の使い方や実験方法の写真資料
- ・定着問題
 - ・生徒が進捗を記入できる共有欄
- ・振り返りシート

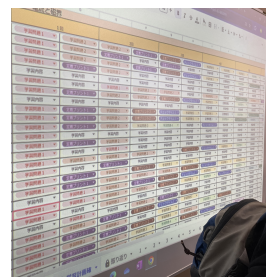


生徒は以上の流れで準備物を使用して学習に取り組んでいた。私が特に注目したのは、「定着問題」である。公開授業内では、課題ごとに定着問題が用意されており、実験を見直しながらかけている生徒の姿が見られた。それらが生徒の知識定着に効果的であったと感じた。本校での授業では、観察・実験の結果をもとに考察し、まとめを教師主導で行っている。後に評価問題を行うが、誤答が多く定着が薄い。課題の後すぐに問題に取り組むことで、教え込みではなく、試行錯誤する中での生徒の気づきが深い学びにつながると考えられる。自校でも評価問題を単元ごとではなく、課題ごとに実施することで自校化できると考えられる。

②ICTの活用と実際の様子

公開授業内で実際に生徒が扱ったツールは以下の通りである。

使用ツール	使用目的	自校での活用
スプレッドシート	計画表や資料の配付、振り返りの実施	資料の配付 共同作業
Canva	結果の写真や情報の共有	予想や結果の共有
Padlet	結果の写真や情報の共有	予想や結果の共有
PCのカメラ機能	実験や結果の記録	実験や結果の記録



スプレッドシートの様子

私が特に注目したのは、「スプレッドシートの活用」である。①で述べた準備物は全てスプレッドシートに掲載されており、生徒が自分で選択して使用できるようになっていた。また、生徒が他者の進捗を見て、自分と同じ進捗の生徒に分からないことを聞きに行くことができるようになっていた。自由進度学習において資料を一カ所にまとめたり、一覧で確認できたりすることは、生徒が自分で学習を進めていくうえでとても重要である。そのためスプレッドシートの活用がとても効果的であると感じた。本校では、単元計画と振り返りが一体化したプリントを作成し、紙のものを使用している。今後スプレッドシートの作成、単元を通した授業プリントや振り返りシートの掲載を自校でも実施していき、自由進度学習の基盤を作っていきたいと考えている。

(3) 講話 信州大学教育学部 准教授 佐藤 和紀 氏

- ・授業準備や教材研究の綿密さが大切であること、教科書の活用をさらにすること。
- ・協働する意味を見いだすためには、ZPD（最近接発達領域、仲間となら又は支援があればできる）に入る学習問題にする必要がある。

4 感想

今回の研修では、単元内自由進度学習について多くのことを学ぶことができた。本校では、自分で選択してツールや実験道具を使用することや、1人で活動することにはまだ難しさがある。安心して取り組める環境をつくる必要があると感じた。また、ICTの活用については、たくさん活用しても使うことが目的にならないように精選して取り入れていきたい。

研修を振り返り、単元内自由進度学習の中で個別最適な学びと協働的な学びができる場面を実際に見て学ぶことができ、大変有意義な研修となった。

今回の研修の機会をいただいたことに感謝し、これからの教育活動に活かしていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年11月23日（土）
- 2 派遣先 学校名（会場名） 明星学園小学校・中学校
所在地 〒181-0001 東京都三鷹市井の頭 5-7-7
<http://www.myojogakuen.ed.jp/>

3 研修内容

2024年度 明星学園小学校・中学校 公開研究会
研究主題「繋いでいくもの、創り上げていくもの」

（1）大会主催の意義について

明星学園は、今年で創立100周年を迎えた。創立当初の時代では、教育は国家権力によって統制され、訓練・練習を主体とした画一的な知識注入を目的としていた。創設者である赤井米吉氏はこれを否定し、それまでの教育とは違った道を模索した。そして現代まで、常に教育の「研究」と「実践」に重点を置き、試行錯誤を継続してきた。

明星学園での公開研究会は、実践の内容を客観視し、常にアップデートしていくことを目的として、1960年代から開催されているものである。今年度の公開研究会の研究主題は「繋いでいくもの、創り上げていくもの」となっている。この主題には、これまで実践してきた時代の流れに左右されない本質的な実践研究を見つめ直し、さらに磨きをかけることを目指すという意味が込められている。

（2）実戦発表①「平安時代 なぜ都を平安京に移したのか？」

1校時は、平安京への遷都の理由を探るというテーマだった。遷都には、金銭や労働力、時間など、様々な面で多大なコストを要する。実際に、平安京の場合は、東西が約4.5km、南北が約5.2kmと、町そのものを新たに作る必要があった。このようなコストを踏まえた上で展開される授業に、生徒たちは関心を示し、次々と疑問を口にしていった。ある生徒たちの間では、教員が指示を出すよりも前に、テーマについて議論していた。授業はそのまま、生徒たちの発言を中心に展開されていた。生徒の主体性が非常に高く、学びの本質について、改めて考えさせられた。このような主体性を引き出すためには、授業テーマの厳選やそれに関する教員の深い理解、生徒と授業者の関係性などが肝要であると感じた。また、自由に発言できる雰囲気の中でも、生徒たちは板書を積極的に書き写しており、授業の流れや仕組みが体系化されていると感じた。

(3) 実戦発表②「近現代史を通じて学習する公民的分野」

2校時は、「日本がとるべき道は脱亜論と興亜論のどちらか」という歴史的事象についてのディベートを通して、主張と根拠の繋がりや価値判断の仕方を学ぶという授業だった。脱亜論とは「日本はアジアから脱し、欧米列強と行動をともにするべきである」というもので、福沢諭吉が提唱したものとして知られている。それに対して、興亜論とは、「欧米列強の脅威に対抗し、アジア諸国との連帯強めるべきである」という主張である。ディベートに際しては、「最終目的は審判や観衆を説得することである」というゴールが掲げられており、論破を目的としないことが強調されていた。これを達成するために、立論・質疑・反駁・再反駁などの役割分担やスピーチの順番、制限時間などが明確に規定されており、生徒たちもディベートのルールを理解していた。これまで、社会科の分野を横断した授業構成を考える機会がなかったため、このような視点での教材研究を進めたい。また、教育におけるディベートの価値を認識した。3年生での公民学習に、積極的に取り入れていきたい。

(4) 全体会

全体会は、劇作家で演出家の平田オリザ氏を迎えて開催された。主題を「主体的・対話的で愛のある学び」とし、世界の先進国と日本の教育カリキュラムの違い、演劇教育に求められるものの、大学入試の変革、変化する社会の中でこれからさらに必要となる能力などについて、事実を基にした講義を聞くことができた。中でも興味深かったのは、教育格差と非認知スキルの関係性についてである。非認知スキルとは、感情や協働性、目標達成能力など、知能検査や学力テストでは測ることができない能力を指す言葉である。この非認知スキルを育成することは、子どもの学力向上に直結する。一般的に、親の経済格差はそのまま子どもの教育格差に繋がると言われるが、家庭の社会経済的背景と子どもの非認知スキルには相関がない。つまり、非認知スキルの育成は、教育格差の是正に直結するのである。学力向上はもちろん重要なことだが、それだけでなく、社会に属し生きていくための能力の育成に注目したい。

(5) 分科会

分科会では、実戦発表②「近現代史を通じて学習する公民的分野」について、大学教授、ジャーナリスト、現役教員、大学生などさまざまな分野の人が集まり、建設的な議論がなされた。教員が題材を緻密に設定することが大切である一方で、生徒の主体性や疑問を無視することは避けなければならないと感じた。また、近現代史の解釈についても、新たな視点を得ることができた。

4 感想

明星学園では、生徒一人一人の個性が最大限尊重されていた。それは、学力だけでなく、これからの社会を主体的に生きるための能力の育成に大きく関与すると感じた。日常の中で、生徒がもつ個性を認め、さまざまな側面から教育を見つめる必要がある。今回学んだことを今後積極的に思考・実践していきたい。

- 1 派遣期日 令和6年11月23日（土）
- 2 派遣先 学校名（会場名） 横浜国立大学教育学部附属横浜中学校
所在地 神奈川県横浜市南区大岡2-31-3
<http://yokochu.ynu.ac.jp/>
- 3 研修内容
 - （1）研究主題 「これからの『学校』のあるべき姿を追求するⅤ」
～主体的に学習に取り組む態度の指導と評価の工夫～

（2）研究概要

【横浜中学校のこれまでの研究の歩み】

横浜中学校では、これまで「これからの『学校』のあるべき姿を追求する」を研究主題に設定し、研究を進めてきた。今年度の研究副題にある「主体的に学習に取り組む態度」は「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」と切り離して考えることができない。そこで、令和4年度には、思考したり判断したり表現したりする過程の中で、「知識及び技能」を発揮させる授業デザインの研究を行ってきた。令和5年度には、単元や題材のまとまりの中で、設定する学習課題や各授業における発問、生徒がもつ疑問など各教科の資質・能力を高める「問い」を中心に、「思考力、判断力、表現力等」を育成できる授業づくりの研究を行ってきた。

過去2年間の研究から、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」の2つの観点の関連を図りながら授業を行うことで、資質・能力が発揮された具体の姿がよりイメージしやすくなった一方、2つの観点を一体的に発揮させ、生徒の学習の過程が充実すればするほど、それぞれの観点を分けて評価することが難しいことが挙げられ、「どこで」「何を」「どのように」評価するかを明確にして単元の学習計画を立てる必要性が明らかになった。

【今年度の研究】

「主体的に学習により組む態度」を育成するためには、「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」を育成する過程で、生徒が「粘り強さ」を発揮したり、「自らの学習を調整」したりすることが必要な場面や学習状況を教師が設定することが不可欠である。先の研究と関連付けながら、主体的に学習に取り組む態度を育成するためには、教師はどのような仕掛け（指導）をする必要があり、どのように生徒の状況の評価すればよいのか明らかにする必要がある。

「主体的に学習に取り組む態度」における評価上の課題としては、「ほかの2観点の評価とどのように分けて評価するか。」「振り返りの記述の評価方法やBとAをどのように判断するか。」「文章を書くのが苦手な生徒に対してどのように適切な評価を行うか。」といった、他の観点の資質・能力を身に付ける過程での意志的側面を評価することの難しさと、総括的に評価する場合、そこに至る過程で生徒が見出した「問い」へのアプローチの仕方やそこで得た学びを適切に評価できない恐れが挙げられた。そこで、横浜中学校では、他の2観点の資質・能力を育成する過程で、生徒が試行錯誤し

たり自ら学習を調整したりする学習や場面を工夫して設定することが重要であるとしている。そして、学習のプロセスを大切にしながら、発問やワークシートなどを工夫し、習得した知識や技能を活用して思考・判断し、表現するような学習課題を設定するなど、指導と評価を一体的に考えることが重要だという共通認識をもって授業づくりを行っていた。

(3) 実践授業の参観：技術・家庭科（技術分野）

○研究テーマ 社会の発展に向けて技術を工夫し創造しようとする態度を育てる指導と評価の工夫

【参観のポイント（本研究会に参加した理由）】

私は「社会の発展と情報の技術」の学習において、オープンエンドの形で授業を終えてしまうことに不安と疑問があった。どのように技術の見方・考え方を働かせて、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、情報の技術を工夫し創造しようとすることができるのか、主体的に学習に取り組む態度を育む指導内容と生徒の思考の流れ、その評価方法について知見を得ることを目指し参観した。

【授業を参観して】

本時の授業では、「生活や社会を支える情報の技術」「コンテンツのプログラミングの実習」「計測・制御のプログラミングの実習」の学習を経て、「社会の発展と情報の技術」を学ぶ段階であった。ここでは、生徒一人一人が、これまでの題材での学習を振り返り、技術の発展が私たちの生活をどのように変える可能性を秘めているのか、これからの社会においてどのような影響を与えるのかについて考えを巡らせ、技術との向き合い方について態度表明できるよう指導が工夫されていた。生徒は前時までの学習に立ち返ったり、新たに必要とされる情報をICT機器を活用して調べたりするなど、夢物語ではなく、根拠をもって考えをまとめていた。それぞれの授業が単発ではなく、この授業に至るまでに技術の見方・考え方を身に付けさせる授業が展開されていたことが分かり、題材としての計画性を強く感じた。私の指導では、終末の授業を主体的に学習に取り組む態度を育む重点としていたことが間違いであり、題材を貫く目標や学びを活用して解決に向かう課題の設定など、生徒が学ぶ必然性を感じられる仕掛けが不足していることを痛感した。

4 感想

今回の研究会に参加し、今後の学習指導に対する多くの学びを得ることができた。また、勤務校に戻り、研究会に参加した経験と私なりの解釈で授業実践をした結果、以下の課題が明らかになった。

○指導と評価の一体化への意識を高める

問題解決における製作（制作）では、完成がメインでその過程を適切に評価することができていなかった。そのため、題材のはじめに生徒と教師が目指す姿と評価の方法について共通理解をし、題材を貫く目標に向け学習が進められるよう、事前準備にしっかりと時間を割いていかなければならない。

○学びの必然性と連続性に気付かせる手立ての工夫

1枚ポートフォリオのデザインを試行錯誤しながら形作っていく。具体的には、題材の事前事後で学びの深まりを生徒が確認できることと、毎授業の振り返りの記述とその活用場面の設定である。

- 1 派遣期日 令和 6 年 1 0 月 2 5 日 (金)
- 2 派遣先 学校名 (会場名) 千葉県千葉市立花見川中学校
所在地 千葉県千葉市花見川区花見川 6 - 2
<https://www.city.chiba.jp/school/jhs/061/index.html>
- 3 研修内容
第 6 3 回関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会 千葉大会
研究主題 生活や技術を工夫し創造する実践的な態度の育成
～主体的・対話的で深い学びを通して～

【本研修に参加した理由】

技術・家庭科の目標として、「生活の営みに係る見方・考え方や技術の見方・考え方を働かせ、生活や技術に関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を養う」ことが掲げられている。

また、本大会では、「授業改善を通して問題解決能力を育て、生徒の学びの自立を図る」ことを目標の一つとしている。そのために、社会の変化に対応しつつ、主体的に課題に取り組む生徒の育成に力を入れている。

本校では、授業中の聞き取りや授業後の振り返り等から、知識面では向上が見られるものの、その根拠の提示に乏しく、授業では知識を得たり、体験したりするだけの場になりがちであった。本校でも、共同的な学びを通して生徒が主体となり学ぶことで、学習した内容が授業時間にとどまらず今後の生活に活用できるよう、普段の生活の中に問題を見いだし課題を設定し解決しようとする資質・能力を育成したいと考える。その参考にしたいと思い本研究大会に参加した。

【公開授業の内容】

技術・家庭科技術分野 B 生物育成

未来社会を支える資質・能力の育成

～技術の仕組みの理解から学びに深まりと広がりをもたせる学習を通して～

日本の第一次産業において、食料自給率の低下や食料安全保障などの解決すべき問題を抱えており、人材の確保、省力化などが大きな課題とされている。これらの課題を解決する上で、消費者や生産者、開発者などの複数の視点から考えることが重要である。このことから、本研究では、生徒が消費者、生産者や開発者などの複数の立場から未来社会との関わり方を主体的に考え、実践する態度を「未来社会を支える資質・能力」と捉え、研究主題を設定し提案されていた。さらに、以下 3 つの仮説に基づき研究されていた。

研究の仮説

- (1) 身近な技術の疑問点から課題を設定し、生徒の技術への関心を高める授業を展開すれば、技術の仕組みへの理解が深まるだろう。
- (2) 仕組みの理解を基に効果的な ICT の活用や生徒が「問い」を立てる授業を展開すれば、課題の解決策の構想・具現化が充実し、学びが深まるだろう。
- (3) 現代的な課題の解決策を複数の立場から構想すれば、学びが広がり、主体的に未来社会に関わろうとする生徒の育成につながるだろう。

実践

(1) 技術の仕組みの理解を深める手立て

技術の仕組みの理解を深める手立てとして、題材を設定する際に身近な生活や社会の技術と関連付けて授業を展開していた。このことから、技術の仕組みの理解を深めて問題解決的な学習を行うことで、予想通りに成長しなかった場合に様々な原因を踏まえて肥料の調整や保湿方法の工夫など、生徒自身が考える様子が見られた。

(2) 課題の解決策の構想・具現化を充実させ学びを深める手立て

生物育成で作物を栽培する際に、肥料の割合やかん水の頻度、作物の状態の見分け方などが感覚的な判断になりがちである。そこで、ICT 機器を利用し、水分計や micro:bit 等を活用して土中の水分含有量を測定し、土の状態を可視化することで、感覚的な基準ではなく、可視化された数値で土壌の状態を把握し水分量の調節につなげたようだった。

また、生徒自身の疑問を問いに発展させるために、教員からの詳細な助言を与えるのではなく、生徒同士の対話を重視していた。

(3) 学びを広げ、社会的な問題に主体的に関わろうとする生徒を育成する手立て

題材のまとめとして社会的な問題を扱う際、問題解決的な学習で深めた学びを活用し、複数の立場から解決策を構想した上で自らの関わり方を意思決定する授業を展開していた。原因を調査する授業の際に、技術の仕組みと調査した原因から「問い」を立て、課題の設定を行う。解決策を構想する際には、消費者としてだけでなく生産者や開発者としての視野から解決策を構想することで学びに広がり生まれると仮定して授業を展開していた。

4 感想

公開授業を参観して特に印象に残ったことは、生徒一人一人生物育成の課題についての生徒一人一人の着眼点の違い、多面的な見方を共有することで、作物を育成する際に生育状況の評価し改善する方法を多くの情報をもとに考えることができていたことである。

生物育成を行う際、栽培を複数回行うことが難しい場合が多く、生育状況の評価し改善する際に必要な情報が集まりきらず、インターネットを通して得る情報等を参考にして、自分の管理方法と比べるまでにとどまってしまうことも少なくない。自分の経験や、身近な体験からくる工夫や失敗とつなげることが難しいこともある。しかし、着眼点を絞り過ぎることなく生育状況の評価することで、同じ作物に対してであっても様々な改善方法が見られ、その結果、1回の生物育成であっても、技術の見方・考え方が十分に広がっている様子が見て取れた。今回参観した公開授業では、生育状況の評価し改善する際に、自己が事前の授業ごとに立てていた「問い」を確認することで、自分が作物の育成にどのような目的をもって取り組んでいたのか（トマトを甘く育てたい、収量を多くしたい等）を捉え直し、その手立てとして適切な改善方法を模索していた。

また、生物育成の学習を行う際に、消費者と生産者の立場になり技術の見方・考え方を広げる授業展開はこれまでも行ってきたが、本公開授業では「開発者」の立場を考える設定も行っていた。そうすることで、生産者・消費者の立場からの考えだけでなく、「消費する」「育てる」以外の場面、生物育成における農場の規模や、設備に係る費用、生産者の負担軽減のための機械化や、複数回ないし持続的に栽培する際のメリットやデメリットなど、非常に多岐にわたる視点をもつことができていた。

最後に、micro:bit を用いた計測・制御し、データ収集を行うことで、普段の栽培では「水をたっぷりあげる」や「土の表面が乾かないように」など、判断基準が曖昧になってしまうものを、土の水分含有量を数値化し、かん水のタイミングを計るなどすることができていた。

自校で生物育成を行う上でも、明確な根拠を提示しながら育成方法を改善したり、計測・制御を行うことで生産者の負担を減らし、持続可能な生物育成につなげたりする視点を醸成していきたいと感じた。

- 1 派遣期日 令和6年11月9日（土）
- 2 派遣先 学校名（会場）国立特別支援教育総合研究所
所在地 神奈川県横須賀市野比5-1-1
<https://www.nise.go.jp/nc/>

3 研修内容

国立特別支援教育総合研究所とは、障害のある子どもと障害のない子どもが共に学ぶことを目指したインクルーシブ教育システムの構築に向けて、特別支援教育に関する研究活動や研修事業、情報普及活動等を推進している国内唯一の特別支援教育のナショナルセンターである。今回その研究所の公開ということで、施設の見学だけでなく次の内容で講話を聞いたり、体験をしたりした。

- 発達障害の理解啓発と発達障害教育の紹介
- ICT機器の活用体験
- みんながお互いを大切に、認め合い、支え合う社会を目指して
- NISEの活動紹介
- 図書室などの施設の公開

【学習障害のある子どもへの指導・支援について】

(1) 学習障害とは？

基本的には、全般的な知的発達に遅れはないが・聞く・話す・読む・書く・計算する推論する能力のうち、特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態をいう。

(2) 特別な指導内容例

① 代替手段等の使用に関すること

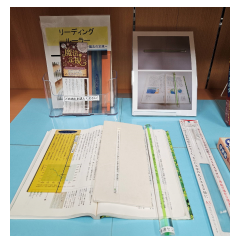
- ・ 漢字の読みが覚えられない、覚えてもすぐに忘れてしまう、似たような漢字を読み誤るなどのつまずきによって、長文の読解が難しい場合、コンピューターによる読み上げや電子書籍を使用する。
- ・ 書くことの困難さがある場合、困難さを改善・克服するために、口述筆記のアプリケーションやワープロを使ったキーボード入力、タブレット端末のフリック入力などを使用する。
- ・ 文章を目で追いながら読むことが苦手な場合、自分がどこを読むのかがわかるように、読む部分だけが見える自助具を活用する。板書をノートに写すことが苦手な場合、授業の流れがわかる教具を活用する。



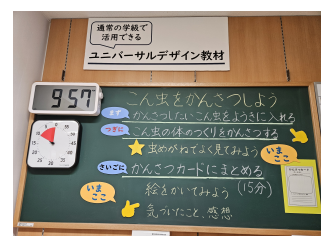
〔電子書籍〕



〔読み上げ・録音機器〕



〔読む部分だけ見える自助具〕



〔授業の流れがわかる教具〕

② コミュニケーション手段の選択と活用に関すること

- ・ 読み書きの困難により、文章の理解や表現に時間がかかる場合、読み書きの内容について関係性や項目を整理して考えやすくするため、図やシンボルなどで示す概念マップのような表現を利用し、コミュニケーションを図ることに楽しさと充実感を味わえるようにする。

③ 言語の形成と活用に関すること

- ・ 言葉は知っているものの、その意味を十分に理解していなかったり、言葉を適切に活用できなかったりして、自分の思いや考えを相手に正確に伝えることが難しい場合、写真や絵と言葉との意味を結び付けながら理解させる。

【学習や生活を豊かにする ICT の活用】

(1) 学習やコミュニケーションを支えるための ICT 活用

	困難さ	ICT の活用例
読む	先生の話聞いて理解できるが、教科書の文章を読んで理解することは難しい。	タブレット型端末の読み上げ機能を使って音声で文章を耳から聞くことで学習内容が理解できるようになった。
書く	板書をノートに書くことに時間がかかり、話し合いや考えるための余裕がない。	タブレット型端末のカメラ機能を使って板書を写真として記録することで、書くことへの負担が軽減し、話し合いや考えるための余裕ができた。
伝える	文字を書くことに時間がかかり、文字で思いや考えを伝えることが難しい。	キーボード入力、音声入力などの方法を使うことにより、積極的に自分の思いや考えを伝えるようになった。

ICT を活用して、子どもたちの努力だけでは解決できない活動を減らすことにより、子どもたちは学習活動の本来の目的に向かって取り組むことができるようになる。学習活動やコミュニケーションの意欲をもった子どもたちはより積極的に取り組むようになり、さらに成長する。ICT は、子どもたちの可能性を広げることのできる支援ツールとなる。

(2) ICT 機器の活用体験

① Kahoot!

多肢選択問題を用いた学習ゲームである。2 択、4 択、○×で答えるなど楽しみながら参加することができ、好きな教科や場面に合わせて問題を作成できるため、学校のさまざまな場面で活用できる。また、実名なしで参加できるため、子どもたちが発言しやすいのも特徴である。中学校でも授業の導入などに使うことで子どもたちの興味関心を高めることにつながる。

② Padlet

1 つの画面に、複数人で文字を書いたり写真を貼り付けたりできる、オンラインツールである。一人一人が発表するわけではなく、クラス全員が一斉に発言ができるので、人前で発表することが苦手な子どもでも発言がしやすい。また、様々な友だちの発言を共有できるので、振り返りや感想等の書き方を参考にすることができ、互いに認め合ったり高め合ったりすることができる。

③ プログラミング (マタタラボ・クミータ)

難しい知識が必要なく、まるでブロックで遊ぶように簡単にプログラミングが学べる。触れて、動かし、見て、繰り返し学ぶ、体験型の学びなので、プログラミングの導入として使える教材である。使い慣れない大人にとっては、慣れるまでに時間がかかったが、子どもであれば遊び感覚ですぐに楽しめそうである。

4 感想

特別支援学級担任として関わる子どもたちは、様々な困難を抱えている。特に中学生においては、その障害による特性のために学習活動に参加することやコミュニケーションをとることが困難になることが多い。子どもが理解したり表現したりしやすい学習方法を用いて、様々な場面で子どものもっている能力を発揮できるように指導していくことが大切である。また、子どもが集中し、活動に参加しやすいよう、わかりやすい指示、課題提示の工夫、環境調整を行うことも必要である。一人一台のタブレット端末が当たり前となった今、子どもたちの困難や苦手を軽減させるための方法やアプリなど今回の視察で得た知識を役立てていきたい。

1 派遣期日 令和6年11月14日（木）～11月15日（金）

2 派遣先 全体会 山形テルサ
公開授業 山形市立第三中学校
<https://www.yamagata-gika.site/>

3 研修内容

(1) 視察校における研究テーマ

「未来社会を生き抜くための資質・能力を育む技術・家庭科教育」
～創造的な問題解決の実践を通して～

(2) 全体会

全体発表 山形大学附属中学校 教諭 金澤 彰裕

山形市立第四中学校 教諭 鎌田 弘子

指導講評 文部科学省 初等中等教育局教育課程教科教科調査官 情報教育振興室教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官

渡邊 茂一

文部科学省 初等中等教育局教育課程教科教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官

熊谷 有紀子

山形県では、40年前から課題解決のために「問題発見」「課題の焦点化」「解決方法の明確化」「解決の試行」「新しい問題に気付く」としての学習過程の提案をしている。生活の中で生かせる教育を目指して、問題解決的な学習スタイルを検討、実践している。学びのプロセスにおいて、効果的に「深い学び」に至る学習活動を取り入れることにより主体的で創造的な問題解決学習が実現する。「深い学び」の姿とは、「自分に必要感のある問題を把握する」「課題を吟味して設定する」「多角的・多面的な視点で考え、最適解を見つける」「自己決定を通して自分の考えを形成する」「学んだことと生活や社会を結び付けて考える」「自己の学びを俯瞰して振り返りを行う」の6つである。この深い学びの姿を実現するために、「効果的な振り返り」を行う。課題を意識した適切なタイミングでの振り返りであり、自分の学習を調整したり、既習事項と生活や社会を結び付けたりし、自分の学びや身に付けた資質・能力を自覚して、次の学びに主体的に取り組むことが可能となる。

(3) 公開授業

【単元名】エネルギー変換の技術

【本時の課題】

ゼロカーボンを目指す取り組みを考えよう。ゼロカーボンな山形県を目指して、班員はどのような「選択」をしていますか。

【授業の概要と気付いた点】

①授業の課題を確認する。

・電子黒板に課題はずっと表示している状態である。

②個人が研究した内容についてグループ内で発表を行う。

・選択した内容「食」「住宅」「消費財」「交通方法」「容器」「照明」の6つ。

・「食」や「住宅」等は家庭科との教科横断的な視点で取り入れていると考えられる。

③発表ののちに、グループで話し合い、実際に実現できそうなテーマを決め、どのような取り組みができるかを考える。

・班のリーダーがまとめていた。グループ発表では、学級や教科における話し合いのルールがきちんと決めてあるため、発表順等決めずとも順番に発言をしていた。

④話し合いを行い、グループでの研究内容をまとめる。

・技術の見方、考え方の中から、重点項目をクラスで共有するために、Excelを用いて円グラフに数値を書き込んだ。共有するのに用いたソフトはTeamsであった。班員から自然と意見が出ていた。

⑤グループで考えた内容をクラスで発表する。

- ・リーダーがクラスの生徒に向けて意見を発表する。リーダーは事前に決めてあり、スムーズに発表に移れていた。

⑥ワークシートに自分がゼロカーボンな山形県を目指すには、どのような取り組みができるかを考えて書く。

- ・教師が机間巡視をして気になっていた生徒をピックアップして発表させていた。

(4) 研究協議

4人一組で研究協議を行った。テーマは「エネルギー変換に関する技術についてどのような内容を行っているか」「どのような教材を使用しているか」「(3)の評価に関することをどのように行っているか」など、意見交換を行った。

- ・技術科は週に1回の授業であり、5教科に比べると授業の頻度が少ない。
- ・エネルギー変換の技術は、ギヤやリンク機構など機械的なことを学ぶ単元であるため、技術科が好きな生徒はよく覚えているが興味がない生徒はすぐに忘れてしまうという意見も出た。

また、文部科学省の調査官から次のような指導助言があった。

- ・環境省が推奨している「デコ活」という言葉について説明があった。これは、「脱炭素につながる新しい豊かな暮らしを創る国民運動」の愛称で、二酸化炭素(CO2)を減らす(DE)脱炭素(Decarbonization)と環境に良いエコ(Eco)を含む「デコ」と活動・生活を組み合わせたものである。
- ・技術科の教員は教材研究を行う際に目まぐるしく変化する社会から授業に生かせる情報を選んで授業をつくる必要がある。
- ・生徒は、1、2年生から問題意識を自分事としてとらえ、2年間で学んだことを3年生につなげる。振り返りも理由や根拠を書き、思考の読み取りを行わせる。
- ・ワークシートには感想で終わらず、自分の考えを書くように指導をしていく必要がある。そのために課題、振り返りを工夫する。

4 感想

- ・生徒の話し合い活動への取り組みが素晴らしいと感じた。根拠に基づいて自分の意見を発言するなどの様子から、日頃から話し合い活動が頻繁に行われていることがわかった。公開授業では、それぞれが自分の意見を端的に述べ、リーダーはその意見を集約し、グループの意見へと反映していた。1、2年生の時から話し合い活動が行われており、担当教員も1年生からの蓄積のおかげだと話していた。
- ・公開授業では、本時の課題が、「ゼロカーボンに向けてどのような取り組みを行うか」だった。私は「取組」とは「今からできること」と捉えていたため、今回の授業のように車の運転の経験がない生徒にむけて車について考えさせたり、公共交通機関をあまり活用しない生徒に公共交通機関について考えさせたりするなど、「今から取り組む」ことが難しい課題に取り組んでいたことに驚いた。今回の授業を参観し、教師が「今」ととらわれず、「いつ」という視点で捉えさせていたことで、将来を見据えてゼロカーボンに向けての取り組みについて生徒に考えさせることができるのだと感じた。
- ・公開授業後の授業は自分の変化を1年生・2年生のワークシートから自分の考えを読み取り、振り返ることによって、自分が考えてきた思考の変化を読み取るよう授業を行う。どのような読み取る授業なのかが大変気になった。
- ・教材研究が充実しており、新聞や環境省のHP・山形市のHP等、様々な情報を活用したり、この授業のために電気自動車を購入したりと、熱心に取り組んでいたのが大変印象的だった。
- ・前時の授業では、生成AIからゼロカーボンに向けてできることを検索し、必要な情報をすぐに手に入れることができたようだった。
- ・今回の視察を通して、自分なりに組み立てて似た授業を実践した。その中で、生成AIは、情報収集のツールとして非常に便利だが、すぐに答えが出てしまう。文章等も作成できるため、これからどのように利用するか、十分に注意しなければならないと感じた。
- ・主体的・対話的で深い学びを目指すには、どの教科でも課題の設定や日頃から話し合い活動の工夫をさせていく必要があると感じた。来年の札幌大会も興味があるテーマなので行きたいと思った。

- 1 派遣期日 令和6年 7月20日(土)
- 2 派遣先 学校名(会場名) 星美学園短期大学
所在地 東京都北区赤羽台4-2-14

3 研修内容

(1) 心理士が思う「保護者とよい関係を作る」ためのコツ

講師 竹森 亜美 (星美学園短期大学 専任講師)

保護者相談での振る舞いに配慮することで、保護者との関係がよくなり、教師の願いや想いが保護者に伝わりやすくなる。

相談における信頼関係を築くための前提条件

- ① 相談に来る保護者の気持ちを想像する
 - ・保護者は緊張・不安な気持ちをもって相談にくるかもしれない。
- ② 相談のはじめに信頼関係を築く
 - ・相談のはじめに緊張を和らげるような声掛けをする。
- ③ 保護者と一緒に支援する
 - ・「わからないことは教えてもらう」姿勢で相談に臨みましょう。

相談のコツ

- ① じっくり聞く
 - ・相槌を打ちながら聞く。
 - ・理解したり受け止めたりしたことを伝え返す。
- ② 保護者を労う
 - ・相談の場に来てくださったことを労う。
 - ・保護者のこれまでの苦労を労い、これからを励ます。
- ③ 見立てる
 - ・行動の理由・背景を想像しながら話を聞く。
 - ・こどもの「発達」、今ある「環境」、これまでの「育ち」の影響を考える。
- ④ 質問をする
 - ・質問することで保護者の話を引き出す。
 - ・いくつかの場面の様子を整理する。
- ⑤ まずは頑張りから伝える
 - ・頑張っていることやできることから伝え、その後難しいことを共有する。
 - ・保護者がどのように思っているか、確認する。
- ⑥ 無理のない提案をする
 - ・「できそう」なことは何かを提案する。

(2) 発達障害の子どもの生き方に寄り添う支援～子どもを生かすための学校・保育園での保護者支援～
講師 服部 純一 (星美学園短期大学 教授)

- ① 保護者への安心感をもたせられる支援
 - ・子どもの状況に関わる多くの社会資源が連携をすることで本人にも安心感と自信が生まれると共に、保護者にも安心感が見られる。
 - ・保護者が安心感をもつことで、家庭内での子どもを取り巻く環境が落ち着く。
- ② 学校や専門機関からの干渉を嫌がる保護者の気持ちも尊重する必要がある
 - ・保護者にしても本人にしても、受け入れ難い状況の中では、どんなに望ましい方法を示しても率直に聞き入れることは難しい。
 - ・保護者や本人がSOSやヘルプの要請をしてきたときは、できる限りそのときに可能な支援法を探すようにする。
 - ・保護者との相談は、子どもが学習課題や運動ができるようになったことへの喜びと同じように、安心感と子育ての自信をつけることの支援である。

(3) 神経発達症診療における保護者支援 ～一緒に悩んで一緒に笑おう～

講師 大谷 良子 (獨協医科大学埼玉医療センター、子どものこころ診療センター)

- ・神経発達症は併存症を来しやすく、併存症の数だけ対応に工夫が必要である。
- ・小児科医は発育、生活習慣、身体・精神面、集団参加、興味関心を通して子どもと親を認める作業を繰り返している。(称赞・保証・共感)
- ・問題と思える事柄も必ず「背景」があると心得る。しかし、決めつけてはいけない。
- ・親も気づいていない、当たり前と思っている「子どもの強み」「親の強み」を探し続ける。
- ・親の支援者に対するネガティブな情報は否定しないが、強化は控える。
- ・先を急がない、状況が好転するときは人それぞれ、見守り続けると変化はある。

4 感想

今回の研修を通して、目の前の子どもたちと保護者のより良い成長のためには、教育者が共感や理解を示すことが成長の後押しになり最良の支援者としてふさわしい姿勢であると実感することができました。このことから、私に関わる生徒や保護者にも、子どもたちの良い面を見つめ、その子一人にしかない個性を大切に育て、保護者と子どもたちの成長を喜び共有できる支援をしていきたいと強く感じました。また、私も実際に、医療へ繋がることに、不安を感じている子どもや保護者に対応することがありますが、受診は不安を軽減するための第一歩であり、診療を続けている子どもや保護者が医療や薬物療法を否定的にとらえず、自分らしくいるための努力をしていることに対して、励ましや労いの言葉掛けができるように支援をしていきたいです。小さなことも共に喜び会える存在となれるようにさらに研鑽に励んでいきます。

1 派遣期日 令和6年11月23日（土）

2 派遣先 学校名 明星学園小学校・中学校
所在地 〒181-0001 東京都三鷹市井の頭 5-7-7
<https://www.myojogakuen.ed.jp/>

3 研修内容 公開研究会テーマ『繋いでいくもの、創り上げていくもの』
・資料より抜粋（原文より引用）

我々が重要視しなくてはならないのは教育の「内容」と「方法」です。教育の「内容」は、目の前の子どもたちの現状に即して考えるべきものです。そして、明星学園では創立当時から子どもたちが主体的に思考できるように、その「方法」を考えてきました。「内容」についても、「方法」についても、重要なのは、科学的研究であります。そしてその「研究」は実際に授業を行い、そこから立ち表れる課題を見出すことによって深まる研究であるはずで

明星学園小学校 校長 照井伸也

・研修日程

受付	校種	1校時	2校時	全体会	昼休憩	分科会
8:00～	小	8:50～9:35	9:50～10:35	10:50～12:30	12:30～13:30	13:30～16:30
	中	8:45～9:35	9:45～10:34			

（1）公開授業及び提案授業（2校時・9年生保健体育科）の参観

- ・研究テーマ 「保健のカリキュラムの現状と課題②」
- ・単元 「9年生：免疫のしくみ」
- ・授業者による研究説明（資料より引用）

現在の明星学園中学校では、8年生、9年生で、週1時間保健の授業を行っている。理科の授業から、「人の体に関わること」をもらってきたという感じで、2年間で「体のつくりとしくみ」「生殖のしくみ」「免疫のしくみ」という3つの単元に絞って学習している。週1時間で2年間という限られた授業数のなかで、浅く広くではなく、中学生にとって身近で興味関心が持てるような内容である「生殖」や「免疫」について、「しくみ」を中心に深く学習していく。2年前には、「生殖のしくみ」を中心に報告したが、今年度は「免疫のしくみ」を中心に、授業も含めて報告する予定である。

・本時の授業について（資料より引用）

本時の授業では、「エイズ」という病気をを用いることにより、前時に学習した私たちが持つ「体を守る武器」について、それぞれの役割を再認識（認識を深める）こと、そして、免疫システムを中心（司令塔）がヘルパーT細胞であり、エイズの病原体であるHIVは、そのヘルパーT細胞を破壊するため、免疫システムが働かなくなり、様々な感染症にかかってしまうということを理解することである。

教師の活動	生徒の活動
1 前時の復習	・「体を守る武器」「エイズの正式名称」などの振り返り ② HIVの宿主細胞（ウイルスが好んで入り込み、破壊する細胞）は、私たちの体を守る武器のある細胞です。ある細胞とは何ですか。 ・「ある細胞」とは何かを選択肢から選び、その理由を考える。 ア・B細胞 イ・ヘルパーT細胞 ウ・キラーT細胞 エ・その他 ・自分の立場と理由を発表し、それぞれの考えを共有する。 ・意見を聞き、立場を変更するかどうかを考える。 ・最終的な自分の立場を明らかにし、理由を再考する。
2 本時の課題確認	
3 活動	
4 主活動	

教師の活動	生徒の活動
5 まとめ（プリント配付）	・結果は「ヘルパーT細胞」であることを確認する。 ・ヘルパーT細胞（ウイルスや病原体に対して攻撃命令を出す細胞）がやられる→攻撃命令が出ない→B細胞もキラーT細胞も動かない→免疫機能の低下→様々な感染症にかかってしまう→エイズに罹患する。ことを確認する。
6 次時の予定確認	・エイズという病気がどうやって感染していくのかについて学習していくことを確認する。

（２）全体会への参加

- ・講演テーマ 「主体的・対話的で愛のある学び」
- ・特別講師 「平田オリザ氏」
- ・講演内容

主体的かつ対話的で深い学びが求められるようになった背景や大学入試制度の改革から、基礎的基本的な知識技能だけでなく、思考力・判断力・表現力、主体性や協働性、多様性が問われるようになってきた。つまり、「何を学ぶか」から、「誰と学ぶか」へ移行するのではないかという考察を皮切りに、講演が進んだ。

身体的文化資本（センス、マナー、コミュニケーション能力、感覚や感性）や非認知スキル（性格や態度、感情、行動習慣）らの「点数化できず、人間性と言われる力」が高いほど、学力が高いという相関関係がみられることや、地方ほど教育格差や文化格差（体験格差）が広がっており、SES（家庭の社会的経済的背景）が高い人ほど学力が高いことは既に明らかにされているが、非認知スキルが高ければ、例えばSESが低くても学力が高くなることも証明されているという提示があった。

つまり、「知識・技能」は、タブレット端末で向上させ、身に付けることができるが、学校教育（集団性）が得意とすることは、「人との関わり合い」なのではないか。すなわち、例えば仮に困難家庭に育った生徒がいたとしても、充実した学び合い（教師の話より、仲間の成功や失敗、発言から理解する機会）環境を創り出すことで、学力向上を図れるのではないかという推論ができる。

また、従来の試験は「学んだ力」を問うものであるが、今後は「学ぶ力」を測ることが大切になってくる。「社会に出たら、自分の思いが100%通ることはない。他者がどう思い、自分がどう考え、答えを何にするかが重要なのではないか」という結論に対し、今後の学校教育で重要となるのは、同情から共感へ、同一性から共有制へと学校教育は推移していくのではないかという予想を立てていたことが印象に残った。

4 感想

本公開研究会に参加し、「生徒中心の授業づくり」「生徒の主体性を引き出す環境づくり」の大切さを見直すことができた。1つの授業をとってみても、従来の教師主導の学習形態でなく、生徒一人一人が空間と時間、学習の雰囲気を作り出すことで、他者との学び合いを引き起こす場面が多く見られた。そのような学習集団が取り組む授業では、期待される姿以上に学びが深まり、確かな知識を身に付けられる時間であったように感じる。

また、配付資料に記載されていたが、「訓練・練習を主体とした画一的な知識注入の教育を批判していく」といった明星学園の理念が表す通り、生徒に与えられている自由度は、私たちの地域で認識しているものより遥かに大きいものであった。だが、学習規律や生活行動に秩序が欠けているわけではない。むしろ、のびのびと活動し、生き生きと行動している姿が見られた。授業内においても、多くの生徒が主体的に参加し、多様な考え方に対し、異なる考えをもった他者によって多面的に評価されることで、知的好奇心が高まるような関係性や生徒の様子が見られた。このことから、本当の意味での自由とは何なのかを考えさせられる機会となった。

一方で、今現在、目の前に広がる自校の学習環境との隔たりが大きいことを実感した。単に統率や統制、規律を批判するわけではないが、この差の理由を「家庭の社会的経済的背景や文化格差」「従来の学校教育の形」にしてはいけない。「主体的・対話的で深い学び」とは何かを再度見つめ直し、個別最適な学びと協働的な学びを掛け合わせるための指導には何が必要なのかを再考し、自らの指導力向上のための研修を重ねていくことで、目の前にいる子どもたちに充実した教育活動や学習環境を付与できるような教員になりたいと強く感じている。

- 1 派遣期日 令和6年11月8日（金）～ 11月8日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名） 宮城教育大学附属中学校
所在地 宮城県仙台市青葉区上杉6-4-1
<https://fu-cyuu.miyakyo-u.ac.jp/>

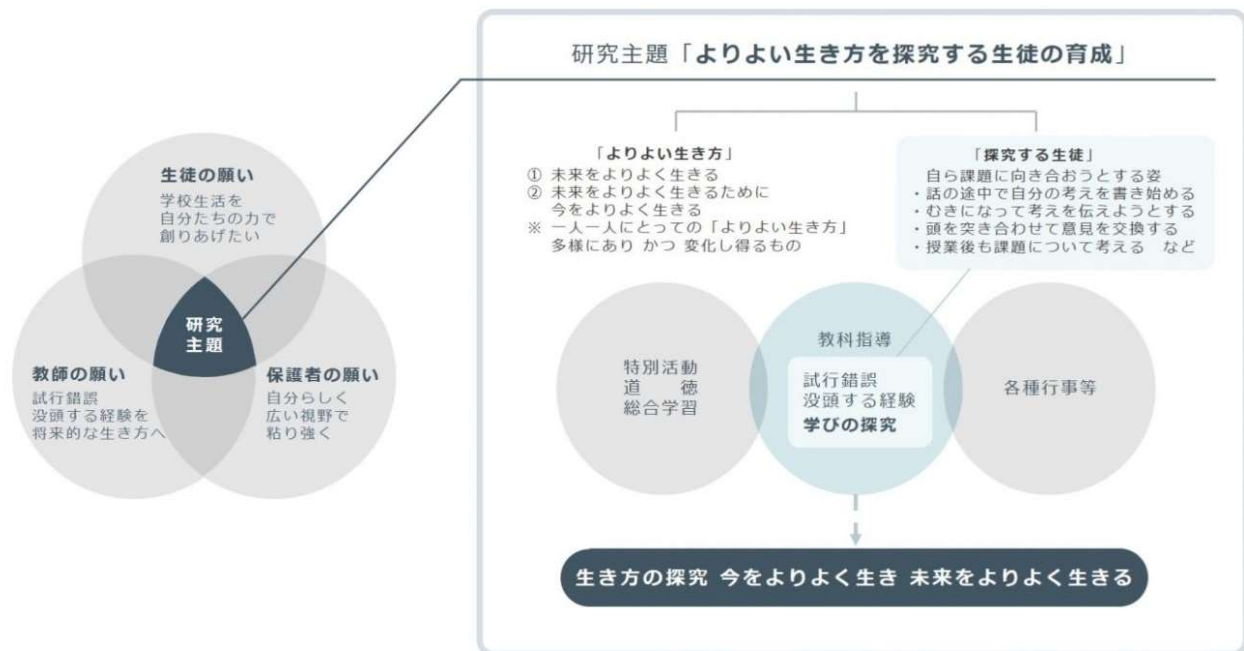
3 研修内容

研究主題 よりよい生き方を探究する生徒の育成（1年次）

（1）研究の概要

宮城教育大学附属中学校の研究主題は、生徒・保護者・教師が話し合いを重ね、学校教育に対する“願い”を集約し、重ね合わせながら設定されたものである。本研究の1年次は、研究主題の「よりよい生き方を探究する生徒の育成」を図るため、「学びを探究する生徒の姿」に焦点を当て、全教科共同の実践研究を行っている。生徒一人一人の「学びを探究する姿」が「生き方の探究」へ転移する可能性やその様相を明らかにしていく。なお、下記の【図1】は、研究全体のイメージ図である。

【図1】



（2）公開研究会（令和6年11月8日）

公開研究会では、【図1】にあるように全教科で「試行錯誤・没頭する経験」を教科指導のキーワードとし、「学びを探究する生徒の姿」に焦点を当てた授業実践を通して、生徒のよりよい生き方の探究につなげていくための授業提案が行われた。なお、今回の研修会では社会科の2授業を参観したが、下記の3年1組の授業を報告する。また、東京大学名誉教授・文部科学省中央教育審議会教員養成部会部会長同教育課程副部会長である秋田喜代美氏による基調講演（演題「未来の子どもたちのために」）が行われた。

（3）授業の実践

① 3年1組 社会科「私たちの暮らしと経済 ～市場の働きと経済～」(守 康幸 教諭)

本単元は、単元内自由進度学習の実践である。本授業では、ワークシートを個別に学習を進めることを原則とし、生徒一人一人が自分のペースで学習プリントに取り組み、必要に応じてNHK for Schoolやwebコンテンツや文献資料などを使いながら学習を進めていた。また、学習場所についても学級の教室、隣の空き教室、多目的フロアなど、生徒自身が選択し、学習を進

めていた。必修課題の学習プリントを終了している生徒は、Googleスライドを活用したレポート作成（宮城教育大学附属中学校では、すべての教科でミニ探究学習としてスライド1ページにまとめることを推奨している）や単元の問いづくり等の発展課題に取り組み、自然と教え合ったり、議論したりと協働的な学びの姿も随所に見られた。【図2】

宮城教育大学附属中では、従来型の一斉授業に加え、単元内自由進度学習、ワークショップ型授業や「問いづくり」、Googleスライドを用いたミニ探究学習等の多様な学習形態や表現活動を継続して行っている。授業後の検討会において守教諭は、このような取り組みから、生徒一人一人が主体的に学習に取り組むことができおり、生徒自身も学びに対する手応えを実感していると述べていた。課題として、学習の自己調整力の向上を挙げており、与えられた課題に終始するのではなく、いわゆる「学びの責任」を自分でやり繰りすることで意味を見出したり、楽しさを覚えたりする生徒を増やしたいとしていた。

②自由進度学習の単元デザインの留意点

守教諭は、学びを探究する生徒の具体的な姿を「自分の学びを自己調整しながら進めている姿」と設定し、本単元全体をデザインする上で、天童市立天童中部小学校の実践を先行研究とし位置づけ、主に下記の3点に留意したとしている。

ア。「一人学び」としての学習効率を高め、指導の個別化を図ること

学習に対する意識が多様化する中、一斉授業の非効率性を無視できない。学びは教師から与えられるという発想では、持続不可能であり、単元内自由進度学習による構成とする。

イ。ガイドライン【図2】と学習計画表で生徒が単元のねらいを理解し、自力で学習を進める見通しと意欲をもたせること

単元の冒頭、「学習ガイドライン」【図2】を配付し、学習目標（生徒の活動の形で表記）と標準時数、学習の流れ（課題の提示と学習教材の例示）を示し、それを基に生徒自身が学習計画を立て、自分の計画に従って学びを進めていけるようにする。

ウ。適切に教師がチェックしたりサポートしたりできる仕組みを単元に組み込むこと

学習の自由度は高めるが、「やらせっぱなしの自習」にならないよう教師による見取り（学習改善につながる評価）はより丁寧に行い、生徒が教師のサポートや相談を受けやすくなるようにする。また、学習の進捗については、学習カードを撮影し、ロイロノートで提出させることで把握し、必要に応じて一斉授業でフォローする。

4 感想

本研究会において、一貫していたキーワードを挙げるとすれば、これまでの教師主導の学びから、学びそのものを「子ども“委ねる”」ことであった。単元内自由進度学習を参観できたことの意義は大きく、自身の指導の視点を見直すことができた有意義な研修であった。子どもたちの成長は、教師の指導力、授業力の改善にこそある。今後は、この学びを学校全体に広げ、学びの主導権を子ども一人一人に“委ねる”授業への転換を図り、子どもたち一人一人が自ら課題を見出し、解決していく力を伸ばしていけるよう今後も自ら研鑽に励んでいきたい。

単元内自由進度学習

私たちの生活と経済（消費生活と経済、生産と労働）

【単元の目標】

- 身近な消費活動を中心に①経済活動の意義、②現代の生産の仕組みや働き、③勤労の権利と義務、④労働組合の意義や労働基準法の精神について理解できる。
- 個人や企業の経済活動における役割と責任、社会生活における職業の意義と役割および雇用と労働条件の改善について多面的・多角的に考察し、表現できる。
- 市場の働きと経済について、現代社会にみられる課題の解決を見通して粘り強く社会に関与することができる。

【学習計画】 標準時数 全7時間（A・Bは必ず終わらせること）

学習内容	教科書	プリント	Check	動画やツール
・学習計画	※学習計画のどこかに、「先生とトーク」を1回以上入れること。			
・収入と支出のバランスにおいて、重要なことを説明する。	130-131	1	☐	(Classroomにあるよ) ・政府広報オンライン ・NHK for School ・その他ICT活用 ・デジタル教科書 (教室の電子黒板、ホールのモニターで使えます)
・契約と消費者の権利とのかわりについて説明する。	132-135	2	☐	
・企業が生産した商品が私たちの手元に届くまでの道しを理解する。	138-139	3	☐	
チェックA 学習プリントをロイロで提出				
・企業の活動の目的を理解する。	140-141	4	☐	・図書館の書籍 ・サポートデスク (ホールにどうぞ) その他自分で探して活用してOK!
・企業がどのような仕組みで経済活動を行っているか説明する。	142-145	5	☐	
・働くことの意味について説明する。	146-147	6	☐	
・日本の労働環境がどのように変化してきたのか調べる。	148-149	7	☐	
チェックB 学習プリントをロイロで提出				

- 1 派遣期日 令和6年 11月13日(水)～11月13日(水)
- 2 派遣先 学校名 福島大学附属中学校(会場名 福島大学附属中学校)
所在地 福島県福島市浜田町12番26号
<https://sites.google.com/ajh.fukushima-u.ac.jp/index/>

3 研修内容

学校テーマ	授業改善と働き方改革の両立を目指して
研究主題	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

(1) 学校テーマ・主題について

福島大学附属中学校では、授業改善と働き方改革の両立を目指すため、学校全体の共同研究の縮減を図り、個人研究を推進することとしている。教科理論の熟考に時間を費やしたり、独創的で汎用性のない研究を追及したりしていくのではなく、持続可能な研究スタイルの確立を目指していくというパラダイムシフトの理念がある。今回の視察では、働き方改革と主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の両立を視察した。

(2) 強みを生かした教育活動について

福島大学附属中学校では、質を保ちつつ効率的に授業改善を行うために、3つの手立てのもと実践を進めている。(図1)1つ目の手立ては、過去の研究紀要などを25年分PDF化し、校内閲覧用のアーカイブを校内のネットワーク内に作成することである。アーカイブを活用することで、過去の実績などの先行研究を容易に確認したり、追実践をしたりしている。2つ目の手立ては、教員を目指す学生等を学校ボランティアとして受け入れる体制を整えることである。実習前や後にこだわらず、学びたいという学生をボランティアとして受け入れ、教職についての理解を深められるような環境づくりをしている。3つ目の手立ては、大学教員からの研究協力により、個人や教科ごとに研究協力者と年間を通して研究を進めていることである。福島大学に教授から研究協力を得て、専門的な見地から研究方法や評価方法などに関する指導助言や連携等についての意見などを取り入れている。

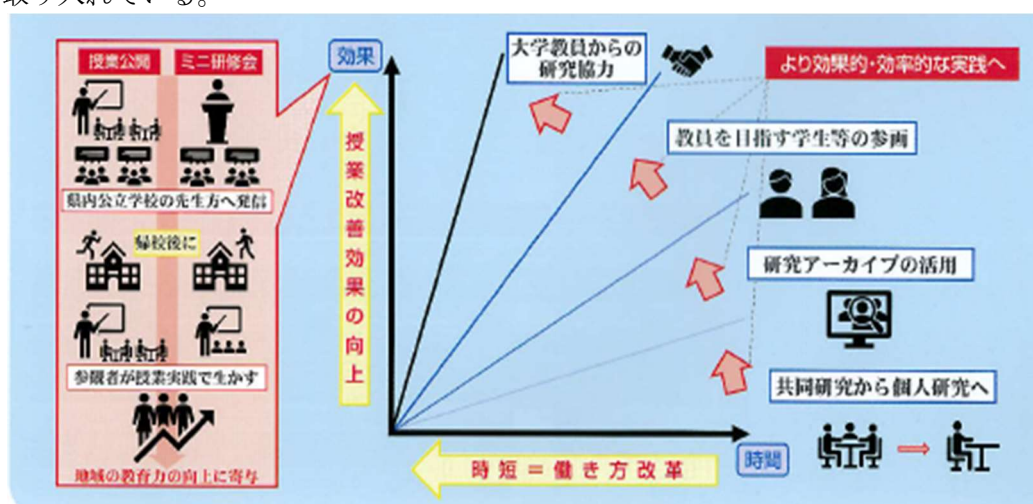


図1 福島大学附属中 3つの手立て

(3) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の実際

① 2年4組 数学「平行と合同」(小林 倫之 教諭)

2学年の数学科では、直接測定できない長さが求められる根拠やその条件を変えて考察することを通して、身の回りの事象に図形の合同が利用できることを理解し、論理的に説明できることをねらいとし、授業が展開された。黒船来航という社会科とのつながりを感じさせる内容から導入が始まり、実際に海岸から船はどのくらい離れているのだろうか、どうやって調べるのだろうかという発問から考察を深めていった。そこで、数学者タレスの用いた三角測量法の手順にそって、実際に作図をし、なぜこの方法で距離を測ることができるのかを長さを図ることが実感できるように工夫されていた。終始生徒とのやりとりをしながら、理解を深めている様子であった。最終的には、三角形の合同を利用することで、海岸から船までの距離が求められることを視覚的、直感的に理解できていた。

特に印象的だった点が2点ある。1点目は、iPadを文房具のように活用している点である。前時

の板書を確認する際にも自主的にタブレットで確認し、自分の考えや共有する際や他生徒の意見を
確認する際にも、タブレットのカメラと共有アプリを活用しながら学習を進めていた。毎授業の板
書の写真をしっかりデータとして残しておくことで、見直しをもって授業を進められ、時間のかか
る意見共有や発表の際にもタブレットを活用することで、他の活動に充てられる時間を増やすこと
ができるため、学びを深めることに時間をかけることができていた。2点目は、成り立つと分かっ
た性質について、変えられる条件はないか、再度考えを深める時間を作っていることである。通常、
ねらいとするものが達成できた時には、その事柄をまとめとするが、どの条件が変えることができ
て、どのように変えればよいのかを考えるなど、より学びを深める取り組みが行われていた。生徒
も教師からの発問のあとには、自ら進んで条件を探し、級友と自然に議論をする姿が見られた。



図2 iPadを用いた意見共有



図3 考えが可視化された板書

(4) 研究実践報告・生徒活動報告について

研究実践報告では、働き方改革と授業改善の両立に向けた取組についての報告があった。特に印
象的だった実践は、変則労働制による平日の部活動指導の勤務時間内での実施や手あげ方式による
授業公開、Google Workspace を活用した校務のDX化などである。教育の質を下げず、効率を上げ
るという目的のもと、綿密に練られた実践が進められていた。

生徒活動報告では、福島大学附属中学校の生徒による、生徒会活動や、学習発表などが展開され
た。いじめ問題については、生徒会が主となってサミットを企画するなど、他の学校との協力をし
ながらいじめをなくすための取り組みの共有が行われていた。学習発表では、理科の授業における
「本物の生物を観察できる環境づくり」についての提案から、中庭をビオトープ空間として整備し
たことについての発表があった。文部科学大臣賞を受賞するなど、幅広い活躍をしている。日々の
授業での学びを実生活や他の教科に結びつけ、教科横断的に主体的な学びが進められていた。



図4 変形労働制



図5 研修会



図6 校務のDX化

4 感想

福島大学附属中学校では、働き方改革と授業改善を平行して行うという現代の学校における課題の
解決に正面から向き合い、研究を進めていた。授業においては、iPad を文房具のように活用しながら、
生徒の意見共有や振り返りを円滑に進め、学びを深める時間を多くとることで、多くの考えを授業内
に展開することができていた。また、働き方改革においては、会議の効率化や労働時間の変形により、
教材研究や部活動の量的・質的向上ができるように工夫がされていた。授業改善においては、板書や
研究紀要などのデータ化により、研究の振り返りや検討を効率よく進められる環境が整備されてい
ると感じた。大学教員との連携も附属中学校ならではの取り組みで、よりよい方向に研究を進められ
るのではないかと感じた。自校においても、今後DX化を進めながら、いかに効率よく授業の質を上げて
いくか、他の教員との研修を大切にしながら探求していきたいと感じた先進校視察であった。

1 派遣期日 令和6年 11月21日(木)

2 派遣先 学校名 川崎市立渡田中学校
所在地 神奈川県川崎市川崎区渡田向町11-1
<https://kawasaki-edu.jp/3/708watarida/>

3 研修内容

第58回 全日本中学校道徳研究大会 神奈川大会への参加

・公開授業

川崎市立渡田中学校 3年1組 題材「二通の手紙」 授業者 佐藤 美子先生

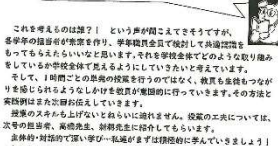
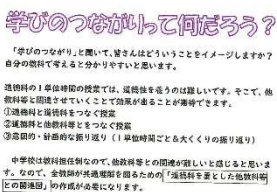
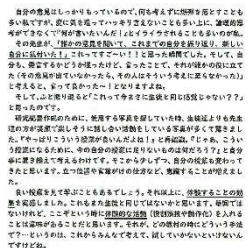
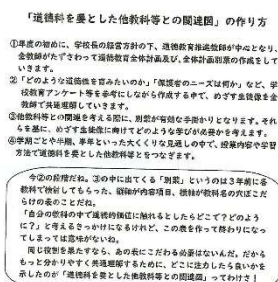
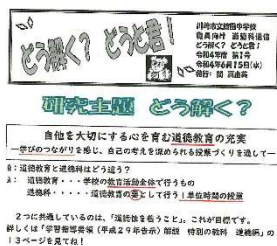
「法やきまりの意義を理解し、自らの義務を果たすことで、よりよい社会をつくろうとする態度を養う」ということをねらいとして、授業が行われた。事前のアンケートを活用した、意図的な指名が行われ、自分の家庭のルールからきまりを守ること、何のためのきまりかを考えることから授業がスタートした。「きまりの中に優しさはないのだろうか」という中心発問で、きまりは誰のためにあるのか、なぜきまりが必要なのか、活発な意見交換が行われた。

また、心の数直線(熊本市教育センター)を活用することで、生徒の思いや考えを発問の度にリアルタイムで表していた。

・研究協議

- ・渡田中学校の道徳に対する取り組みの発表
- ・授業内容について
- ・日頃の道徳の授業に対する取り組みについての意見交換
- ・指導講話

渡田中学校では、道徳推進委員会を中心として授業づくりを行っていること、この発表に至るまでの先生方の取り組みが話された。感想にも書いたが、先生方が課題研のように、毎週道徳について話し合う時間が設定されていた。そこで、中心発問を作成したり、内容の精査が行われていたりすることがわかった。1つの授業をつくるために、長い時間の研修が行われていた。また、以下の画像のような道徳通信が、先生間で配布されており、先生方が道徳をどのように進めていくかが必ず周知されていた。



教員間での模擬授業等を行っている様子が載っており、授業を実際に行いながら生徒の反応や中心発問を考えていることがわかる。毎回は難しくても、学期に1回程度、担当の先生が行っていくのも、授業力向上の手立てだと感じた。

研究協議では、会場に右のような「気づきのタワー」が全クラス分用意されており、「感想」「授業のポイント」「つながりについて」「その他」に分け、付箋を貼っていった。授業者の先生は、すぐに目を通すことで、本時の振り返りや課題を確認し、授業反省を行っていた。このように、授業の反省もすぐに確認できる方法は、研修会だけでなく、日頃の授業にも活用することができそうである。

※「つながり」は、道徳と道徳のつながり、道徳と他教科のつながり、生徒同士のつながりを表すものであった。



4 感想

「特別の教科 道徳」という教科に対する取り組み、意識の高さを感じた。今回、訪問した川崎市立渡田中学校では、教員の道徳の研修が細かく行われており、道徳推進委員会を中心として、授業構成や発問などが話し合われていた。特に、自分の中で印象に残ったのは、授業内の中心発問を教員間で話し合い、生徒の実態に応じたものを作っていた点である。どうしても道徳の授業では、教材研究の段階で指導書を参考にして、中心発問を設定しているが、渡田中学校では、教員間で生徒たちにあった中心発問を作成し、授業の展開を行っていた。実際の生徒の様子を把握することで、1つの道徳の授業を作り上げるために、多くの時間をかけていることを感じた。現実としては、そこまで多くの時間を道徳の授業の教材研究に割くことは難しいが、日頃から学級、学年の生徒に目を向け、その実態を把握することは自分自身も重視していきたいと感じた。

次に、授業形態の豊富さも今まで、自分が意識していない点であった。小グループやコの字型の形態を活用することは、自分も行うことはあった。今回、授業を参観させていただいた中で、座席を円形に配置し、意見や考えを述べる人に人形を回していくという様子が見られた。30人程度の学級でも、必ず1人1回発言が回ってくるという仕組みになっていた。発言は、些細なことに関する気づきや自分はこういった経験をしたなど、自分の考えを端的な言葉で伝えていたが、必ず自分事として、その授業の価値項目を考えることができており、参考になるものであった。また、ICT機器の活用も効果的であり、心の数直線やデジタル付箋、Google スライドなど、様々な方法で、自分の思考を他者へ伝える工夫がされていた。生徒の考えを広げるためにも、ICT機器の活用の重要性を改めて感じた。

1 派遣期日 令和6年11月15日（金）

2 派遣先 学校名 宮城教育大学附属小学校（文部科学省研究開発学校指定）

所在地 〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉6丁目4-1

<https://fu-syou.miyakyo-u.ac.jp/>

3 研修内容

（1）全体会

①研究開発課題

各教科等の特質に応じてICT機器や情報手段を適切に活用する活動の充実を図ることで学習の基盤となる資質・能力を育成していく新教科「小学校情報科」の目標や内容の構成・系統等と構築していく研究開発

②研究の目的

- ・教育課程の編成及び効果的な指導方法の開発を行う。
- ・「小学校情報科」で育成する学習の基盤となる資質・能力（特に情報技術や情報社会の仕組みなどを含めた発展的な情報活用能力）の具体を設定する。
- ・学習の基盤となる資質・能力を評価する具体的な方法を開発する。

③研究に取り組む理由

- ・子供たちが自分の情報端末を使う経験を保証できる環境づくり
- ・端末や情報の活用についての指導事項が明確に位置付けられていない
- ・情報社会を生きる一員として必要な資質・能力が明確でない

④研究開発の経過

令和5年度（研究1年次）

令和6年度（研究2年次）

令和7年度（研究3年次）

令和8年度（研究4年次）

取り組み

- ・「小学校情報科」の枠組みの見直し
- ・各教科等との内容や資質・能力のつながりの検討
- ・幼、小、中の系統性の検討

（2）授業参観

①情報科：第5学年「光る！反応する！インタラクティブアートにチャレンジ」

本時のねらいは、意図した表現に近づくよう論理的推論をしながらプログラミングしたり、LEDの光や色、材質に着目しながらイメージを広げて表現したりすることができるようにすることであった。

児童は、LEDをビニール袋やペットボトル、和紙など身近なものと組み合わせる形で作り、クリスマスツリーや天の川を連想させるような作品を製作していた。コンピュータを活用し、LEDが意図した発色になるように調整したり、順次に色に変化するプログラムを作成したりして表現していた。さらに、音センサを用いて、大きな音を感知したときや作品の動きに合わせて光り方が変化するなど高度なプログラミング技術を身に付けている児童もいた。また、コンピュータの活用だけでなく、イメージに近づけるために光の広がる材質や形に着目するなど図画工作科と関連付けた学習も見られた。

②理科：第5学年「人のたんじょう～動物の発生と成長～」

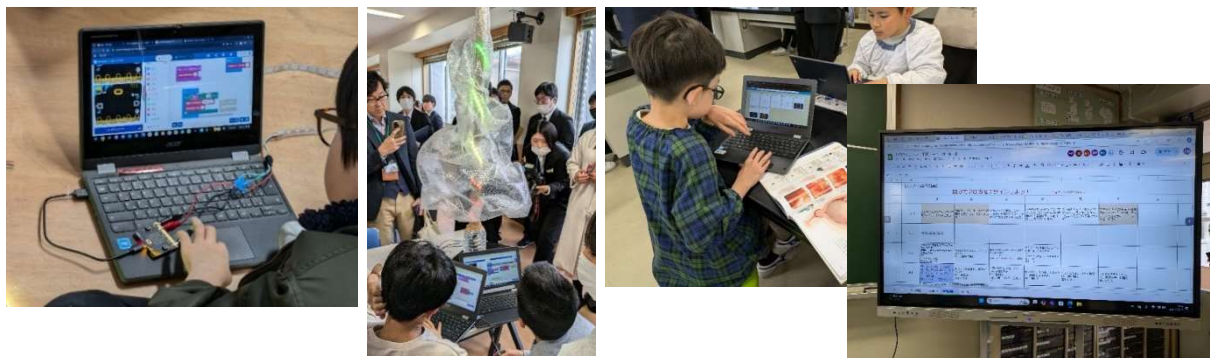
本時のねらいは、胎児の母体内での成長について調べる活動を通して、それらについて理解することができることであった。

導入では、前回の振り返りを行い、それをもとに本時の目標を立てた。その際、puzzle chat という ICT を用いて個人の目標を打ち込み、児童がお互いの目標を読むことができた。どのような目標を立てればよいかわからない児童は友達の目標を参考にしながら考えることができた。

個々の計画に基づいて調べ学習が進められた。調べている内容はそれぞれで、「子宮の

中の仕組み」や「育つための養分・息の仕組み」、「赤ちゃんの性別はいつわかるのか」など、興味のある内容について調べていた。調べた内容はスライドやドキュメントにレポートとしてまとめ、データを共有しながら学習を進めることで相互参照できるようになっていた。見て理解できるようにわかりやすくまとめている。情報収集はコンピュータだけでなく、関係図書が置いてあり、児童の疑問に養護教諭が直接答える準備もされていた。

授業の終わりは、まとめの途中経過を2人の児童が発表し、puzzle chat に振り返りを記入し、学習計画の見直しを行った。



(3) 分科会

テーマ「教師の情報活用能力」

宮城教育大学附属小学校、岩沼市立岩沼北中学校の実践について話を聞いた。

- ・職員会議資料のクラウド化…会議中に記録者が記入、会議終了後に資料完成
- ・安全点検表のクラウド化…タブレットを持って見回る
- ・超過勤務の見える化…スプレッドシート⇒超過時間の減少
- ・協議の見える化…事前に意見を記入しておく
- ・学級日誌の電子化…スプレッドシート
- ・教育計画の電子化…スプレッドシート
- ・週予定の電子化…保護者へ
- ・職員室の情報化…前面黒板のモニター化
- ・校内回覧文書のペーパーレス化
- ・月予定、行事予定、時間割のデータ保管
- ・通信票の押印とりやめ…回収しない方法へ
- ・生成AIの活用…問題作成

『紙をデータにできないか』という考えからのスタートだった。デジタル化することでペーパーレスは省コストにつながり、業務の軽減にもつながっている。しかし、進路希望調査など押印の必要な場合や、出張復命書など学校単位では変えられないもののデジタル化はまだ難しい。

(4) 講演会（東京学芸大学教職大学院・教授/学長特別補佐 堀田龍也先生）

演題「これからの時代の学びに向けた小学校情報科の可能性」

4 感想

情報科の授業では、児童がイメージ通りにLEDの光の色や光り方を調整していたことに驚いた。担当教師がプログラミングについて説明することは一度もなく、児童はすでに技術を習得していた。早いうちから学ぶことは、知識や技能を身に付けるために大事なことだと感じた。また、プログラミングの技術だけでなく、LEDを使った表現も個性が表れており、材料や形の工夫もされていて、表現力の豊かさに感心した。

理科の授業では、ICTの活用に重点を置いて参観した。導入、調べ学習、まとめ、振り返りの全ての場面でICTを使用していた。場面ごとにICTの種類は異なり、どの場面でもどのように使用するのが効果的なのかがよく考えられていた。児童はタブレットで文章を打ち込んだり、いろいろな種類のICTを使用したりすることに慣れていて、活動がスムーズに行われていた。

「教師の情報活用能力」についての分科会では、業務軽減という意味では働き方改革のアイデアでもあり、大変参考になった。『紙への思いを残さない！戻らない！』という考え方が必要であると言っていた。続けていけば慣れるということを見習うので、児童生徒のために積極的に情報活用に取り組んでいきたい。

- 1 派遣期日 令和6年 11月24日(土)
- 2 派遣先 学校名 横浜国立大学教育学部附属横浜中学校
所在地 神奈川県横浜市南区大岡2-31-3
<https://yokochu.ynu.ac.jp/>
- 3 研修内容
【研究主題】
これからの「学校」のあるべき姿を追求するⅤ
～主体的に学習に取り組む態度の指導と評価の工夫～
(1)開会行事
(2)公開授業
球技：「バレーボール」
生徒が見通しを立て、主体的に活動をするための手立ての工夫
(3)生徒による授業評価等
(4)校長あいさつ・基調提案
(5)TOFY発表
(6)全体講演会
石井 英真 先生 京都大学大学院教育学研究科 准教授
【演題】観点別評価をどう捉えるか

4 授業公開について

(1) 授業の詳細について

球技：「バレーボール」

～生徒が見通しを立て、主体的に活動をするための手立ての工夫～

授業は中学1年生の球技「バレーボール」であり、単学級、男女共修の学習形態で行われた。公開された授業は10時間扱いの7時間目であった、グループでの整列や授業に入るまでの雰囲気から、これまでも男女共修で温かな人間関係の中で体育の学習が行われてきたことが感じられた雰囲気であった。

(2) 学習の内容について

① チームの課題確認

前時に行われた試合の反省から、レシーブの仕方やポジショニングの確認等ホワイトボードを使用し話し合う活動が行われていた。生徒の主体的な話し合いのため、各グループによって課題の視点やポイントは様々であり、バレーボールに対する知識を活用した上での話し合いが行われていることに感心した。単元の導入の時点でバレーボールに関わる知識の定着をしていることが伝わる話し合いの内容であり、導入時における単元への意欲付けをいねいに行う必要性の重要性に気づいた。



② グループ練習

前時の反省からチームの課題を解決するための練習やそのやり方を①の話し合いからチームで考え、実践した。レシーブに力を入れたグループでは、掲示物やタブレットからレシーブのポイントやコツとなる情報を収集し、お互いのレシーブのフォームをタブレットで撮影をしながら確認していた。また、レシーブも今の自分たちができる範囲の練習とし、ある生徒はノーバウンドで、ある生徒はワンバウンドで行うなど、技能を高めるための方法を自ら模索し実践していた。グループの課題を発見し、課題の解決策を考え、実践している姿から体育科の学習だけではなく、学校として生徒の主体性を引き出す工夫をされていることが伝わった。



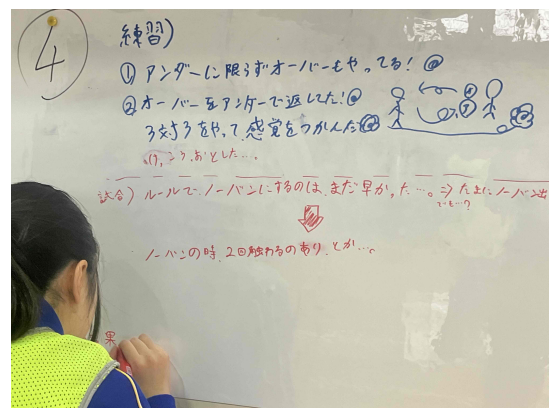
③ ゲーム

ゲームで重要視されていたことは、「全員がバレーボールの試合を楽しめる」という点であり、お互いにバレーボールを楽しくするためにはどのようなルールを設定すればよいかを考え実行していた。あるグループのルールは、「アタック禁止・ワンバウンドOK・全員タッチしてから相手コートへ返す」というルールであった。ネットの高さもバドミントンネットだったことから全員が安全に楽しく学習を行えている様子だった。技能の差を認め合い、自分たちの目標を達成するための方策を主体的に導き出し、生徒同士で納得できるルールの設定や技能差の譲歩など、誰もが安全に楽しめる授業を生徒自身が考え、実行できる環境を作り出せていることに感心した。



④ 振り返り

課題設定からチーム練習、試合を通じて見えてきた自分たちの課題と次時についての見通しについて深め合っていた。リーダーとなる生徒がグループの生徒の話を聞きながらグループなりの反省を行い、次時のルール設定や課題について意欲的に話し合う様子が見られた。振り返りでは、「何について振り返るのか」という着眼点があることで話し合いの内容が深まっていくことを客観的に見ることができた。



5 感想・まとめ

今回の研究発表会では、主体的に学習に取り組む態度の指導について、教師側が意図して行うこと、教師が生徒に意図して託すことなど、生徒の主体性を最大限に導き出すための工夫を見ることができ大変参考になった。今回学んだことを今後の教材研究に生かし、「できる・わかる＝楽しい」に繋がるような授業を実践していきたい。

- 1 派遣期日 令和6年11月23日（土）
- 2 派遣先 学校名（会場名） 横浜国立大学教育学部附属横浜中学校
所在地 神奈川県横浜市南区大岡2-31-3
<https://yokochu.ynu.ac.jp/>
- 3 研修内容
【研究主題】 これからの「学校」のあるべき姿を追求するⅤ
～主体的に学習に取り組む態度の指導と評価の工夫～
- （1）開会行事
（2）公開授業
1年 国語科 生徒が試行錯誤し、自らの学習を調整できる指導と評価の工夫
（3）生徒による授業評価等
（4）学校長あいさつ・基調提案
（5）TOFY発表
（6）全体講演会 石井 英真 先生 京都大学大学院教育学研究科 准教授
【演題】 観点別評価をどう捉えるか

4 公開授業

（1）授業参観を通して

① 本授業の提案コンセプトや見所

物語文のある場面を「演じる」こと、そして、同じ場面を他者がどのように演じたのかを交流することによって、場面と場面、場面と描写などを結びつけて考え、解釈を深める授業を提案する。

② 単元について

○小説に秘められたドラマを読みとろう

～描写や場面のつながりに着目して『星の花が降るころに』を解釈する～

本単元は、小説を教材とし、特定の場面を演じる活動を通して、生徒たち自身が登場人物の心情や場面と場面のつながりを考えながら内容を解釈できるようにすることをねらいとしている。具体的には、「演じる」という活動を通して、本文全体に登場する場面同士の結びつきや、複数の描写同士を関連させながら内容を解釈することで、作品の新たな一面を発見したり、作品全体を通じた登場人物の心情の変化に着目したりする力を育てていくことである。

③ 授業スタイル

主にTeamsを活用し、教師と生徒のやり取りをしていた。課題や各グループが演じた動画を見ながら他者の考えを読み取り、自分の考えを整理していた。自分の考えを表現するためには、ワークシートを活用していた。個人→グループ→全体の授業の流れが確立しており、生徒も迷いなく課題に取り組んでいた。グループでの練り上げの際、机をTの字にセットし、互いの表情が見られるようにしていた。全体発表では、スクリーンに映った動画を解説をしながら物語の解釈に努めていた。



④ 生徒の反応・様子

グループでの練り上げの際、机をTの字にセットし、互いの表情を見ながら話せるため、生徒の安心感が見られた。話し合っている際、自然と「そうそうそう」や「確かに」などの言葉が出ていた。さらに、「〇〇が〇〇につながるんじゃないかな…」など、新たな解釈をする姿に感心した。

全体発表では、それぞれのグループの発表に対し、自分たちの考えと比べながら熱心に聞く姿が多く見られ、物語の解釈に努めていた。

(2) 今後の授業に活かすこと

① 授業の基本的な流れ

まずは、自力解決の時間をきちんと取り、自分の考えもつことが大事である。その考えを武器に、グループで練り上げる。そして、全体で発表し、考えを広げたり深めたりする。今までも「個人→グループ→全体」の流れで授業を展開していたが、改めてその大切さに気づかされた。

② 机の配置をTの字

場面に応じて、机の隊形を変化させることは大切である。中でも、「Tの字」は、顔と顔の距離が近いことから、互いの表情が見え、安心感につながっているように感じた。心理上の考えかもしれないが、生徒が安心して学ぶことができる環境づくりの一つとして実施していきたい。

③ 「演じる」

今までは、物語の場面を「演じる」ことなど思いもしなかった。「演じる」ためには、登場人物の表情や行動の描写、場面と場面のつながりや情景等を読み取ることが必要である。自分の考えをもった上で意見を練り上げるため、自然と理解が深まると感じた。だから、発達段階に応じて発問を工夫しながら試してみたい。

(3) 観点別学習状況のあり方

① 「知識・技能」の指導と評価

文学的文章を読解するにあたっては、言葉や表現の意味を適切に捉え、それらを解釈に役立てる必要がある。また、細かな表現の描写などについては、生徒自身の体験と重ね合わせながら文脈上の意味を解釈させていく。さらに、演じ方について考える際には、心情の解釈と本文の根拠となる部分を記述させ、言葉や表現を適切な意味で捉えて解釈しているかについて評価する。

② 「思考・判断・表現」の指導と評価

場面を演じるためには、それに必要な情報を自ら探す必要がある。特定の場面に限らず本文全体のつながりに注目しながら読むことで、一つ一つの描写の意味を考えながら読むことの重要性も実感させたい。総括的に評価する際には、これらを解釈しているかに留意する。

③ 「主体的に学習に取り組む態度」の指導と評価

学習プランを用いて生徒が見通しをもって学習に取り組めるようにする。また、自らが演じたり他のグループの演技を見たりすることで、行動や会話の意味を考え、試行錯誤しながら場面のつながりや描写に着目して本文を解釈することにつなげる。総括的に評価をする際は、本文を解釈するためにどのように取り組んだか、どのように解釈が変わったかについて振り返りに記述させ、生徒の粘り強い取り組みや学習の調整の様子を評価する。

4 感想

今回の授業参観を通して、たくさんの「気づき」があった。「演じるために内容を解釈する」。「内容を解釈するために演じる」という考えは、とても参考になった。まだまだ勉強が足りないが、ある単元で「演じる」を試したところ、生徒がいつもより意欲的に取り組む姿が見られた。だから、私自身も演じられるくらい教材を読み込んで好きになり、生徒の理解が深まるような授業を常に心がけたい。

- 1 派遣期日 令和6年11月21日（木）～11月22日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名） 川崎市立渡田中学校（カルッツかわさき）
所在地 神奈川県川崎市渡田向町11-1
（神奈川県川崎市川崎区富士見1-1-4）
- 3 研修内容（以下、（1）～（5）は紀要より引用、参照）
 - （1）大会主題・研究主題「自他を大切にすることを育む道德教育の充実」
～学びのつながりを感じ、自己の考えを深められる授業づくりを通して～

（2）主題設定理由

川崎市立渡田中学校の生徒は、とても素直で日頃の生活に対して前向きな姿勢で過ごしている。特に、行事に対しては一生懸命に取り組む生徒が多く、行事を通して成長する姿が多くの場面で見られる。また、教員からの言葉かけに応えようとする気持ちもあり、いろいろなことに興味をもって取り組んでいる。生徒同士の関わりを見ると優しい気持ちをもって相手に接し、様々な場面でコミュニケーションをとっていると感じられる。

しかし、思いを言語化することを苦手としている生徒が非常に多い。そこから、自分に自信をもてずにいることがあげられる。自分の意見をしっかりと発信できる環境をつくり、生徒一人ひとりが自信をもつことで、自分のことだけでなく友達を気遣うなど、周りにも配慮することができるようになってほしいという願いをこめて、職員全体で授業研究に取り組むことにした。

（3）研究・実践内容

① 関連図の作成

年度初めに、学校長の経営方針の下、全教師が携わり道德教育全体計画及び、全体計画別葉を作成する。他教科等との関連を考える際に、別葉が有効な手がかりとなる。それをもとに、「道德科を要とした他教科等との関連図」に示しためざす生徒像に向けてどのような学びが必要かを考える。さらに、各学期や年間といった大くくりな見通しの中で、授業内容や学習方法で道德科と他教科等との関連図が複数できることになるが、めざす生徒像に向かって見通しをもった道德教育を実践しやすくするために「『道德科』を要とした他教科等との関連図」を作成する。

② 意図的なつながりを意識した授業づくり

授業での前時までの発言や記述した内容を振り返らせる場面を設定すると、生徒はその時の学習を想起し、そこでは気付かなかった自分の気持ちや考えを整理して、さらに深く考えたり、新しい自分を発見したりする機会ができる。前時とのつながりのある発言は、他の生徒の気づきを促し、多くの生徒が前時の自分の思いと現在の自分の考えを深める場面を作ることにも期待される。教師がつながりを意識するだけでなく、生徒もそのつながりを意識できるように意図的なしなかけを工夫した授業づくりをする。

③ 授業の振り返りと計画の振り返り

意図的・計画的な振り返りについて、1単位時間ごとの振り返りをし、次に道德科と関連させた教育活動を終えてからの振り返りをする。それらをもとに、教師は学習過程のどの部分で関連付けた内容に触れれば効果的であったかを検証し、次の授業に生かす。また、関連させた教育活動後には、生徒がどのようなことを学び、考えたのかを整理させながら意図的・計画的に振り返りを行う時間を確保する。教師は、生徒の振り返りをもとに、学年会で、関連させた教育活動が適切だったかどうか考え、改善策を立てていく。年度末にはさらに、全体の指導計画や全体計画別葉等を見直し、改訂版を職員会議で話題にし、共通理解を図り、次年度に良いスタートができるよう引き継ぎを行っていく。

このように、教師、生徒の双方から、意図的・計画的な振り返りをする。さらに、めざ

す生徒像に向けて、他教科等と組み合わせて横断的に授業を行うことで、どのような変容が見られるかを検証し、個人内評価をする。

研究推進の1年目は、道德教育と道德科の役割について知ることと道德教育の「つながりを意識する」、道德科の授業力向上「多様な指導方法の研究」に注力して研究を進め、2年目は、つながりを意識した「しかけ」の実践と生徒の振り返りと教師の振り返り＝生徒の評価と教師の授業改善を意識して研究を進めていった。

(4) 研究の成果

① 関連図の作成

- ・めざす生徒像に向かって見通しをもった道德教育が実践しやすくなり、授業改善につながった。
- ・めざす生徒像のどこに焦点化していくかを共通理解するのに有効であった。

② 意図的なつながりを意識した授業づくり

- ・他教科との関連図をより具体化させた授業の導入を行うことができた。
- ・生徒の評価をより計画的に行うことができた。

③ 授業の振り返りと計画の振り返り

- ・PDCAを実施しやすくなり、自分の授業に対して明確な観点で評価ができた。

(5) まとめ

今回の研究推進を通して、道德科において「自我関与」できるように授業を組み立てることで、生徒が多面的・多角的に考えることができ、自分の考えの深まりを実感できると考えられる。そのような効果を出すためには、道德科の授業でのつながりや、道德科と他の教育活動の学びのつながりを感じられるような「しかけ」をしていくこと、道德科の授業に限らず、学んだことが生かせたと実感できる体験の機会を設定し、教師や友達からの評価によって「自己の変容」に気付く機会を意図的に設定することが必要である。そうすることで、より深い学びになっていき、自己肯定感の向上も期待することができる。また、道德の授業で何を学ぶのかを教師と生徒で共に考え、目的意識を共通理解することで、生徒のさらなる変容も期待できる。

4 感想

今回の研修では、学校教育全体とのつながりを意識して道德教育を進めていく実践方法を研修することができた。また、学校長のリーダーシップの下、めざす生徒像を明確にし全職員だけでなく全校生徒とも共通理解を図った上で、道德教育の計画につなげていく大切さに気付くことができた。

公開授業では、前時の授業とのつながり、日常の体験とのつながりなどを意識して発問や教材の工夫が行われていた。それだけではなく、教室や廊下の掲示物等を利用して授業の発問につなげるなど、学校の教育活動全体とつなげる仕掛けがあったことが大変参考になった。また、発表の仕方、質問の仕方、発表の聞き方なども細かくモデルを示しており、自他を認める土壌をつくる工夫もされていた。そのような工夫があるため、発言する生徒も自信をもって発表することができ、生徒同士の議論が活発化して多様な意見がでることで、より多面的・多角的に物事を捉えることができていたと感じた。

道德科では、教師と生徒が共に考え、何を学ぶのかの共通理解を図り、その目的が明確になることで生徒に大きな変化をもたらすのではないかと実感した。そのためには、担当している教師だけでなく、全職員で協力体制を整えて道德科と全教育活動をつなげていく環境づくりが求められており、学校長と道德教育推進教師をリーダーとした全職員との連携を深め学校全体の道德教育として実践していけるようにしていきたい。

・参考 第58回全日本中学校道德教育研究大会資料より抜粋

- 1 派遣期日 令和6年8月20日（火）
- 2 派遣先 会場名 イイノホール
所在地 東京都千代田区内幸町2-1-1飯野ビルディング4階
- 3 研修内容

第1部の保健管理研修会では、疾病管理の目的や実施の留意点について改めて確認をすると共に、てんかん発作時の坐薬挿入や口腔用液の投与についての条件等を確認した。発作時の服薬について、学校での対応が求められる際には、保護者や主治医と事前の確認を十分に行い、連携を図る。学校での対応が決まった際には、教職員への周知徹底を図り、教職員全体で共通認識をもつよう校内体制を整える。てんかん発作時の坐薬挿入や口腔用液の投与方法については、実際に対応する人が限定されると考えられる場合でも、全教職員での研修実施が望ましい。てんかん発作及び学校事故は、どのような状況下で起こるか分からない、予測不能のものであるため、その場に居合わせた教職員が適切な対応を取ることができるよう、研修を実施すべきである。

第2部のてんかんについての講演では、てんかんの概要と平時と発作時の対応を学んだ。てんかんは、明らかな原因がないものを「特発性」、脳に何らかの異常があるものを「症候性」、さらに体の一部で発作が生じているものを「部分発作」、体全体で発作が生じているものを「全般発作」として、その組み合わせにより細かく分類されている。また年齢によって、発生しやすい発作の種類がある。学童期では全般発作が多く、一見ば一っとしているようにも見える欠伸発作から体を大きくけいれんさせる大発作まで、幅広く発生する。思春期・青年期では6割が部分発作となり、全般発作が起きる割合は少なくなる。成人ではほぼ部分発作となり、全般発作の割合はさらに少なくなる。これは脳の成長と共に、発作が抑えられるようになることや、自分の身体に合った薬が見つかることによるためと考えられている。このように患者によって症状が様々であることから、薬の種類も多様である。診断時には、発作時の様子を詳細に聞き取り、その上で適切な薬剤を選択することが重要である。

平時の対応では、治療薬の副作用に注意をしつつ、生活制限をかけすぎない対応が求められる。てんかんの治療薬は、いずれの薬剤であっても脳の興奮を抑える働きをもっている。そのため、副作用としてめまい・ふらつき・眠気の症状が起きうる。薬剤によっては、怒りっぽい・無気力などの精神症状も出ることがある。児童生徒が飲んでいる薬剤と副作用を確認し、配慮して対応する必要がある。スポーツ活動への参加については、担当医と協議した上で、発作が起きた時に危険から回避するための制限を設ける。基本的には、事故に対する過度の心配から活動を禁止することは好ましくない。例えば水泳では、短時間の入水とする・浅いところで泳がせる・監視体制を強化する等の対策が考えられる。また給食時の対応として、一部の抗てんかん薬で柑橘類（グレープフルーツ・ザボン・ブント・ハッサク・スイーティー）の摂取により、副作用が強く出現する可能性があることから、治療薬の種類を確認し、柑橘類を摂取しないなどの対応が考えられる。

発作時の対応では、該児童生徒の安全を確保することが最優先である。安全な場所へ移動し周囲に危険なものがあれば遠ざける、発作がおさまるまで観察をする（記録する）、可能であれば動画を撮る等の対応が考えられる。発作が5分以上続くか、短い発作でも反復しその間の意識の回復がない状態は、「てんかん重責」と言われる状態であり、その状態が30分以上続くと後遺症が残る可能性があるため、救急車を要請する。その他にも、呼吸困難・けがや出血等が見られる時には、救急車を要請する。発作時の投薬依頼がある場合は、坐薬もしくは口腔用液の投与を行う。坐薬は次の発作の予防目的であり、効果発現が15-30分後であるのに対し、口腔用液はてんかん重責状態の発作を止める薬のため、坐薬よりも効果の発現が速いとされている。いずれの薬

剤を投与する場合にも、当該児童生徒のプライバシーを確保し、規約に基づいて投与することが求められている。

てんかんは稀な疾患ではなく、適切な対応により治療が可能である。疾患の特徴を正しく理解し対応することで、児童生徒の安全を守ることができる。

4 感想

てんかんをもつ児童生徒は稀ではなく、当該児童生徒への対応、緊急時マニュアルの作成、教職員への周知等、養護教諭が対応を求められる場面は多くある。本研修において、抗てんかん薬の副作用や、発作時の具体的な対応などを学ぶことができたのは、養護教諭としての資質能力を向上させるために大変有意義であったと感じる。研修会場の入り口にて、口腔用液プログラムの練習用見本の掲示があり、実際に触って操作方法を学ぶことができた。昨年度の通知より、学校でのプログラムの使用が認められるようになったものの、実際に触れる機会はなかったため、今回の研修で、プログラム使用時の見通しをもつことができた。また、講演の中で、てんかん発作のシミュレーション動画を視聴した。これまでの経験では、学校内で生徒が発作を起こしても、養護教諭が駆けつけたときには発作が治まっていることがほとんどであり、実際に発作を見る経験がなかった。発作時の顔の動きやけいれんの様子などを動画で学ぶことができ、大変勉強になった。てんかん発作の種類は多岐に渡ることから、自分の学校の児童生徒はどのような発作を起こしやすいのか、保護者や主治医から具体的に教えてもらうことが大切だと感じた。

スポーツ活動への参加について、特に中学生では水泳学習及びスキー学習が、発作時のリスクが高い活動として慎重な対応が求められる場面である。今年度、本校ではてんかんをもつ生徒が水泳学習に参加することを希望した。生徒が安全に学習に臨むことができるよう、保護者や主治医と連携し学校全体で協議の上、体制を整えた。具体的には、緊急時の対応マニュアルの作成・教職員への周知、1対1の監視体制の整備、内線電話や担架の整備、緊急時に使用する浮きの購入等である。教育的な観点から、活動を過度に制限することは好ましくないという見方がある一方、学校としては、児童生徒の安全を確保しなければならないという責任もある。両立させるための手立てを考え、管理体制を整えることは、養護教諭としての重要な役割の一つであることを改めて認識した。

抗てんかん薬は脳に作用する薬であるため、副作用に十分注意が必要であることを学び、改めて本校の生徒が処方されている薬とその副作用を確認した。特に柑橘類の摂取で、副作用が強くなる薬があることは初めて知った。処方されている薬の種類について、年度始めに確認していても、通院の際に変更になったり量がかわったりすることがある。本人及び保護者から丁寧に聴き取り、定期的に確認をしていきたい。副作用の一つであるめまいやふらつきが重度である場合には、転倒やけがの恐れがある。そのような自覚症状がある場合は無理をせず、休養することを当該生徒とも改めて確認した。疾病をもつ児童生徒は、生涯においてその疾病と付き合っていかなければならない。学校内での事故防止に努めることが最重要であるが、児童生徒が自ら考え判断する力を養うことも大切である。活動への参加が可能かどうか、児童生徒と共に考えることで、児童生徒が自らの心身の状態と向き合い、自分で判断する力を伸ばせるよう支援していきたい。

日々の職務の中で、知らない疾患名に出会ったり理解していたつもりでも実は浅い知識で止まっていたりと、研修が追いついていないと感じることがある。本研修のように、一つの疾患について専門の医師から詳しく話を聴くことは、疾患に対する理解をより深めることに効果的である。これまでは、希望研修に参加することが少なかったが、今後は積極的に活用し、専門性を高め、日々学び続ける養護教諭でありたい。

- 1 派遣期日 令和6年10月4日（金）～ 11月15日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名）宮城教育大学附属小学校
所在地 〒980-0011 仙台市青葉区上杉六丁目4-1
<https://fu-syou.miyakyo-u.ac.jp/>

3 研修内容

(1) 10月4日（金）共同研究テーマ 「自ら学びを切り拓く」（2年次）

子供の姿を見取り、語り、共有しながら省察と検討を積み重ねることで、この姿の実現を目指す。各教科部会で、研究テーマを達成する児童の姿を各教科等ならではの学びに向かっていく姿として、各教科部で主体となって研究に取り組んでいる。

(2) 11月15日（金）小学校情報科新設による研究テーマとその取り組み（2年次）

「各教科の特質に応じてICT機器や情報手段を適切に活用する活動の充実を図ることで学習の基盤となる資質・能力を育成していく新教科【小学校情報科】の目標や内容の構成・系統等を構築していく研究開発」という研究の目的のもと、小学校情報科の教科の内容領域を、Aコンピューターを活用した問題解決 B情報技術の仕組み C情報社会とのかかわりの3つに設定し年間指導計画に反映させている。学習者・授業者にとってイメージしやすく編成している

(3) 10月4日（金）の研修内容

○国語科（6年）「海のいのち」の授業参観

ア 国語科の取り組み

自ら学びを切り拓く姿として、自ら言葉に働き掛け、問い続ける姿と設定している。

イ 授業実践

児童自ら問いを立て、物語を読み取り、評論文を書く活動を実践（本時は、10/11）

問い続けることができる単元構成として、物語文を読み取りの後に、評論文を書く活動を取り入れていた。事前に設定した児童自らの問いの解決を図るために話し合いを行っていた。

ICT活用では、自分の考えをタブレット端末でまとめたり、自ら立てた問いの解決が困難な場合は、グーグルフォームのアンケート機能を活用して、学級全員に意見を求めたりする等の学習活動を行っていた。

児童の問いを学習の全体の課題としたり、考えを深めるときに少人数が立てた問いを補助発問として活用していたり、児童がまとめていた評論文の表現を提示したり、児童の考えをゆさぶる補助発問を教師側が用意していたりしていた。児童が自分の問いを解決するための手立てやヒントを学級の友達との交流から得ていた。

(4) 11月15日（金）での研修内容

○算数科（6年）「データの特ちょうから判断しよう」の授業参観

ア 算数科の取り組み

自ら学びを切り拓く姿として、問題解決の過程や結果を振り返って問いを見だし、総合的・発展的に考え続ける姿と設定している。

イ 授業実践

本時の課題は「1年生が楽しめるゲームのルールを考えよう」である。（本時は、15/25）まず、10時間程度で中央値や最頻値等について学び、基礎的な学習内容の定着を図って、本時の課題に取り組んでいる。また、仮想データである2つの山のあるグラフについて、データ分析や考えの妥当性を批判的に検討していた。その後、生データを使ってデータ分

析を行い、楽しめるゲームのルール作りに向け考えを各自まとめていた。

課題設定については、日常生活に照らし合わせた内容で、児童達の意欲は高まっており児童同士の熱心なやりとりがあった。しかし、協議会では、「楽しめる」という不確実な要素を入れた課題は、児童の考えを拡散する原因になるため、入れない方がよいことや問題作りは、解答例をいくつも（児童数）予想しておくべきであり、結論をしっかり持って指導すべきという意見や講評があった。

ICT活用については、自分達の考えをアプリで共有しながら進めることで、教師が見取りやすく支援しやすい。また、発表し合わなくても、児童も相互に考えを共有できるという利点もあった。（AIの考えが本当かどうか妥当性があるかどうか考える学習も行ったことがあるそうだ。）

データの活用という単元内容は、小学校情報科という教科と関連を図ることができる重要な学習内容である。

○小学校情報化（４年）（５年）の授業参観

４年の「データを集めてよりよく動かそう」（本時は、４/６）では、toioというプログラミングで動く小型の車を使ってボールを集める学習活動を行っていた。３Dプリンターも活用してボールを集めるために車につける部品も作成していた。５年の「光る！反応する」（本時は、７/１０）では、センサーを使って工作作品を光らせるプログラミングを行っていた。

どちらの学習でもスプレッドシートを活用して、学習にどのように取り組むのか、振り返りでどのようなことを学んだか等を記入し、教師、児童同士で共有していた。

協議会では、どちらの学習においても課題設定が重要であり、日常生活との関連を図った内容の課題を出したり目標を意識させたりするとよいという講評があった。

４ 感想

（１） １０月４日（金）での研修内容

① 国語科（６年）「海のいのち」の授業参観

発表する際に、児童達は教科書の叙述を根拠に挙げながら自分の考えを詳しく述べることでできていた。自ら発表したり、友達の発言を聴いて質問したり、自分の考えと比較したりしながら、話し合い活動を進めている姿は、主体性をもった姿だった。

担当教員が児童の学習の様子をしっかりと見取り、その様子から補助発問を用意していたことが、素晴らしい。教材研究の大切さを感じることができた。

（２） １１月１５日（金）での研修内容

① 小学校情報化における年間指導計画について

プログラミング学習やICT活用スキルだけでなく、スクリーンタイムについて考え健康との関連を図ったりアンケートアプリの活用方法を学んだり教科横断的な学習内容やアカウントの重要性等の理論、情報活用ルールやマナー、メリット、デメリット、リスクなどまでしっかり学習する内容となっている。

② ICT活用について

主に考えを共有するツールとして授業で効果的に活用している。また、掲示板で話し合ったりスプレッドシートで意見や振り返りを学級内で共有したりして授業を進めており、１学級の人数が多いときの教師や児童間での情報共有に有効であるとわかった。

プログラミング学習の教材が時代に合ったものを豊富に活用していて、うらやましく感じた。本校でも、購入、活用できたらと思った。

③ 算数科（６年）「データの特ちょうから判断しよう」の授業参観について

話し合う姿勢は、国語と同様、多様な意見が出て素晴らしいものだった。妥当性を批判的に検討するために、学習問題を工夫していた。児童の活動をしっかりと確保した上で、児童同士の話し合いを繋げる役目を教師が行っており、的確で短い指示も素晴らしかった。

- 1 派遣期日 令和6年11月23日(土)
- 2 派遣先 学校名(会場名) 明星学園小学校・中学校
所在地 〒181-0011 東京都三鷹市井の頭 5-7-7
https://www.myojogakuen.ed.jp/elementary_school (小学校)
https://www.myojogakuen.ed.jp/junior_high_school (中学校)

3 研修内容

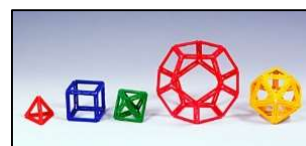
(1) 公開研究会テーマ「繋いでいくもの、創り上げていくもの」

- ・明星学園では創立当時から教育の「内容」と「方法」を重視した実践へ取り組んできた。創立同人である赤井米吉は、「土地に応じ、学校に応じ、又児童個人に応じても可柔軟あらねばならぬ。」として、教育方法を模索してきた。今年度はこれまで実践してきた不易の実践研究を見つめ直し、磨き上げることを目的として各教科部で研究を行った。

(2) 1校時公開授業「正多面体」(8年次)

- ・明星学園では教育課程の編成を変更しており、一般的には7年次に学習する「空間の図形」の分野を8年次で学習していた。
- ・本時では「合同な平面図形のみでできる立体(正多面体)」に焦点を当てて授業を行っていた。授業の導入で既習の平面図形や立体図形についての知識の確認を行った後、ポリドロン(図1)を配付し、実際に生徒自身が正多面体の制作を行えるようにした。
- ・生徒が制作する正多面体は時間の都合もあり正四面体と正八面体に限られたが、生徒同士でパーツを交換しあったりして、より大きな多面体(正十二面体、正二十面体)の制作を試みる生徒もいた。一方で立体にできず、正三角形を敷き詰めた平面を作成する生徒もいた。
- ・生徒の制作した作品の中で凹多面体を作成した生徒もあり、そこから発展させ正多面体の定義へと話を展開し、本時のまとめとした。

図1「ポリドロン」



(3) 2校時公開授業「線対称な多角形の作図」(7年次)

- ・本単元でも教育課程の編成を変更が見られた。本単元「平面の図形」自体は一般的にも7年次に学習する内容ではあるが、本単元の導入として使われるタングラム(図2)を扱う上で図形の長さを求めるために、8年次で学習する「平方根」と「三平方の定理」の学習を修めている。
- ・本時では「円を用いた線対称な図形の作図」に焦点を当て授業を行っていた。授業の導入で扇形の図形の作図を行い、扇形の1つの対角線が垂直に二等分されていること、扇形が線対称な図形であることを確認し、それをもとに円を用いた線対称な図形の作図へ取り組んだ。
- ・明星学園中学校では、「シェーマ(図、図式、計画の意)」を平面図形の観察の軸として設定していた。単元を通して線対称のシェーマ(図3)や点対称のシェーマ(図4)を図形の中から見出すことで図形の性質を見つけ出す、その性質をもつ平面図形を作図できると考え実践していた。本時の学習では扇形、つまり線対称のシェーマを見出すことで、円を利用して作図した多角形(図5)が線対称な図形であることを説明できるとまとめている。

図2「タングラム」

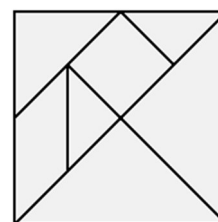


図3「線対称のシェーマ」

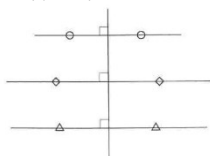


図4「点対称のシェーマ」

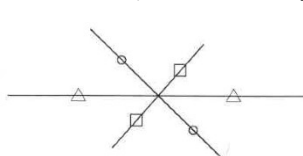
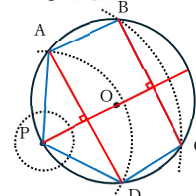


図5「多角形PABCD」



(4) 1校時公開授業についての研究協議

- ・ポリドロンを用いて実際に生徒に実例を作成させ、そこからいくつかの例を収集し、分類して法則性をまとめるという実験数学としての学びに力が入られていた。協議に参加されていた方からは、重ね三角錐(図6)やねじれ三角柱(Boerdijk-Coxeter helix)(図7)のような正三角形のみで構成される多面体に触れても学びが深まるのではないかと意見もあった。
- ・研究協議の中で、立体を作図できずに平面のみを作成していた生徒がいたことをうけて、立体の例をいくつか見せたり、教師が実際に立体を作成したりするといった、生徒の活動の方向付けが必要だという意見が出た。

図6

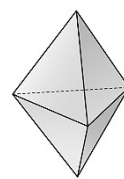


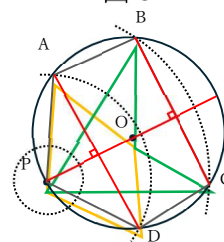
図7



(5) 2校時公開授業についての研究協議

- ・対称性を発見する視点を単元の軸として設定し、図形の中に凧形を見出すことで線対称性を、平行四辺形を見出すことで点対称性を発見する視点を重視しての実践であった。参加者からは一般的に扱われるひし形ではなく、凧形を用いる有用性を問われたが、教育課程の編成や学習方法の都合を考えるとひし形よりも凧形のほうが扱いやすく、生徒の理解を深められていた。
- ・本時の中では時間の都合上、図5のような角の数が奇数個の多角形を扱うのみにとどまったが、発展として角の数が偶数個の多角形も扱える。角の数が偶数個の多角形を扱うためには、点Pを省いて辺を結ぶことで角の数を減らす。又は点Pと点Oを結んだ直線の点Pと反対側に点Qを加えることで頂点の数を増やす。
- ・図形教育を行う上で大事な活動として、「なぜか？」を繰り返し問う必要があるという話があった。本時の実践においては、なぜ作図した多角形(図8)は線対称であるといえるのか、を繰り返し生徒に問い返すことを意識したと話していた。生徒が線対称のシェーマを理由に説明している場面でも、なぜそのシェーマがあるのか、なぜ凧形といえるのかを逐一確認することで、作図した図形が線対称である理由の理解が深まる様子が見られた。

図8



4 感想

(1) 1校時公開授業「正多面体」(8年次)

- ・正多面体を扱う場面で、自分は展開図を組み立てて立体の性質を観察する学習をすることが多い。本時のように生徒にパーツだけを渡し、1から組み立てさせる学習形態も生徒の興味を引く、実物に触れ理解を深めるうえでは効果的であると感じた。

(2) 2校時公開授業「線対称な多角形の作図」(7年次)

- ・円を利用した線対称な図形の作図を扱ったことがなかったので、興味深く感じた。線対称を扱う場面でこの作図方法に触れることで、線対称の性質をより深く理解できると思う。

(3) 全体について

- ・教師の説明のための黒板と、プリントの例示や生徒の考えの集約のための電子黒板が教室前方で併用されていた。また実際に立体図形を作成したり、コンパスを用いて作図を行ったりする場面と、タブレットを用いて学習や振り返りに望む場面もみられ、アナログとデジタルをベストミックスさせた授業スタイルが確立されていた。
- ・明星学園では数学の学習を進めるうえで「必要性」を重視していた。単元や領域の関連性を考え、最終的な目標を達成するためにどのような知識や考え方が必要かを生徒に問いながら、学習を進めていた。そのため、生徒自身が知識を与えられるのではなく、学ぼうという姿勢をもつことで必要感をもって学習に臨んでいた。学習内容と学習方法の工夫が、生徒の主体的な学びの姿勢に繋がっている実践だと感じた。

- 1 派遣期日 令和6年11月13日（水）
- 2 派遣先 学校名：静岡県下田市立下田中学校
所在地：静岡県下田市敷根765番地の1
<https://www.city.shimoda.shizuoka.jp/index.html>

3 研修内容

【研究主題】

誰一人取り残さない授業づくり～対話的な学び・協働的な学びを通して Well Being～

(1) 公開授業参観及び研究協議

① 公開授業

3 学年 総合的な学習の時間 （8 講座に分かれて実施）

「キャリア座談会～あこがれから夢へ、そして志へ～」

- ・ 1 コマ 50 分を 2 回実施。1 教室に講師 1 名、生徒 15 名程度、ファシリテーターの教員 1 名＋コミュニティ・スクール委員または市教育 DX アドバイザー
 - ・ 講師による自己紹介、モチベーショングラフ（人生を 1 本の線で表したもの）の提示の後に座談会に入った。講師についての資料はあらかじめ生徒のタブレット端末にも送付されているため、必要に応じて自分のタブレット端末にメモをする生徒がいた。
 - ・ 座談会では、講師の仕事や生き方についての質問、生徒自身の現在の悩みや将来への不安についての相談など、さまざまな対話がなされていた。
 - ・ モチベーショングラフがあることにより、各講師の生き方についても伝えられていた。
 - ・ ファシリテーターの教員やコミュニティ・スクール委員または市教育 DX アドバイザーが必要に応じて生徒への質問を促したり、考えを深める問いかけをしたり、自らが質問をしたりしていた。
- 少人数による座談会のため、生徒と講師の距離も近く、活発な対話が行われていた。生徒からの質問や相談は、講師の話を聞いた上での具体的なものが多かった。また、「飽き性なのですが一つのことを続けるコツはありますか？」「努力することが好きではないのですが夢を叶えるには努力しないとだめですか？」など、生徒自身がよく自己分析した上での悩みや、正直な思いを発言していた。普段の授業における対話や、自分自身を見つめる場の設定などの大切さを改めて感じた。

② 研究協議（授業者、学年担当、コミュニティ・スクール委員、授業参観者）

- ・ 総合的な学習の時間では、下田に住む立場の異なる他者への理解を深める体験（高齢者体験や妊婦体験等）、下田の特色を生かした体験活動（サーフィン体験、釣り体験等）、下田市内外の外部講師からの職業講話、ものづくり体験など、多くの活動を行った。
 - ・ 職場体験活動では、体験に参加するだけでなく、事業所の方へのインタビューを通して、どのようにキャリア形成してきたかについて調査を行った。
 - ・ 以前は、「今は高校受験に合格できればよい」「将来はお金を稼げればよい」と考える生徒が多かったが、3 年間のキャリア教育を通して、「将来やりたいことが決まってきた」「どんな大人になりたいか考えるようになった」と変容した。
 - ・ 学校教育と地域が協力して活動する中で、地域の新たなコミュニティも形成された。
- 3 年間の総合的な学習の時間で、一人一人がキャリア形成のイメージをもち、将来への考えを明確にしていけるよう、体験活動を通して学ぶ機会を設定していた。さまざま

まな働く大人と対話し、共に活動することで、働くことへの理解や関心を深められると感じた。また、本校も職場体験活動を行っているが体験活動のみである。関わったことのない大人から働くことの意義や仕事のやりがい、生き方についての話を聞くことは貴重な機会となるため、事業者の方へのインタビュー等を本校でも取り入れたと考えた。

(2) 全体会及び講師指導

① 全体会

- ・「誰一人取り残さない授業づくり」とは何か、全校集会で生徒にも投げかけ、考えさせた。生徒が主体的に学びに向かうことが大切だと捉え、授業づくりを行った。
- ・校内回覧板研修、エピソード記録などの校内研修の充実を図っている。
- ・「共につくる」をキーワードに、教職員、生徒、家庭、地域の連携を大切にしている。
→生徒と共に考えるということを大切にしていた。教育活動の中で、家庭や地域との連携は重要だと感じた。

② 講師指導(静岡大学教育学部 准教授 塩田真吾先生)

演題：「誰一人取り残さない教育に向けて」

- ・「誰一人取り残さない」とは、学力という視点だけでなく、人生を豊かにするという将来的な視点が必要である。
- ・正解がない人生において探究的な視点や対話が不可欠である。
→授業での「問い」「対話」「協働」
- ・20年後の仕事時間は短くなり、家族と過ごす時間や趣味を楽しむ時間が長くなる。アンケート結果より、現在の中高生の余暇の過ごし方はスマートフォンでほとんどが完結してしまう。(SNS、動画視聴、ゲーム等)
→キャリア教育＝仕事だけではなく、「人生を楽しむ、豊かにする」というライフキャリアの視点が必要である

4 感想

学習課題の設定を重点に、生徒と共につくる授業づくりに力を入れていた。「誰一人取り残さない授業」にするために、授業内での問い、生徒が対話・協働する場面の設定の重要性を感じた。また、校内回覧板研修やエピソード記録など、さまざまな教職員が考えを共有したり、一人一人の生徒に関わったりと、学校全体で取り組む体制が整えられていた。

総合的な学習の時間においては、地域と連携した取組が印象的だった。職場体験活動以外にもさまざまな体験活動や講話、座談会等を通して、多くの大人と関わる機会が設けられていた。学校内だけではなく、実際に体験したり対話したりする中で、さまざまな人の考えにふれることは生徒にとって何よりの学びとなると感じた。講話にもあったが、「人生を楽しむ、豊かにする」というライフキャリアの視点を大切にし、生徒の価値観や人生観を広げられるような総合的な学習の時間にしていきたい。

今回の視察を通じて、授業内での「対話」「協働」の場面設定についてより一層考えていきたいと思った。ICTの活用により、以前よりも生徒同士の意見の共有ができるようになってきている。課題に対して考えが深まるよう、発問や授業形態、ICTの活用について研修を重ねていきたい。また、地域との連携が生徒の学びを深めることを実感した。さまざまな活動を通して大人と関わり、対話を重ね、その後自分自身を見つめてきた生徒たちは、自分の言葉で表現する力に長けていた。体験活動は普段の授業だけでは得られない学びが大きいことを感じた。今までの授業づくり、総合的な学習の時間の取組を見直し、生徒一人一人が充実感を得て、将来につながるような教育ができるようにしていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年12月4日（水）
- 2 派遣先 学校名（会場名） 宮城県気仙沼市立津谷中学校
所在地 宮城県気仙沼市本吉町津谷桜子2
<http://www.kesennuma.ed.jp/tsuya-cyuu/html/>

3 研修内容

（1）研究主題

自ら学び、考え、表現できる生徒の育成 ～生徒に委ね支える授業づくりを通して～

- ・「自ら学び、考え、表現できる生徒」を育むための視点と具体策

【視点1】「個別最適な学びによる授業づくりの工夫」

- （ア）生徒一人一人が自分の学習を自己調整できるように、単元の見通しをもたせるとともに、学習の振り返りを蓄積させる。
- （イ）学習時間の個別化のため、家庭における学習と授業の学習との効果的な連携を図る。
- （ウ）一人一人の学びを保障するための ICT の日常的な活用を行う。
- （エ）自分の考えを表現する際、生徒が最適な方法でまとめられるようにする。
- （オ）単元構想を見直し、発展課題学習や課題選択学習、自由進度学習を取り入れることで、自ら学ぶ力を高める指導を行う。

【視点2】「協働的な学びによる授業づくりの工夫」

- （ア）対話を豊かにするため、発問や題材を吟味するとともに、生徒が疑問や問題意識をもつような課題等を設定する。
- （イ）対話を豊かにするため、ロイロノートや Google Workspace 等の ICT の活用を行う。
- （ウ）ペアやグループなど、状況に応じ、課題解決に向けた学習形態を生徒が選択できるようにする。

（2）藤山 篤 校長先生からの講話

藤山校長先生には、津谷中学校の研究内容についてお話をいただいた。藤山校長先生から伺った話の中で、特に印象深かったのは以下の2点である。

1つ目は、個別最適な学びに重点をおいた授業を、総授業時数に対してどれくらいの割合で実施するのがよいのかという点である。藤山先生からは、さまざまな学校の教育モデルを提示していただき、個別最適な学びを取り入れた授業は総授業時数に対して20～40%程度が好ましいというお話をいただいた。個別最適な学びが重要視される中でもきちんと教えるべき内容は教え込むこと、生徒たちに委ねるところはきちんと委ねることの重要性を教えていただき、今後の学習指導の在り方について自信をもてるようになった。

2つ目は、総合的な学習の時間の在り方についてである。藤山先生からは総合的な学習で重要なことは「個人」での学習であることを強く教えていただいた。私自身、「総合」＝「学校行事」というイメージがあったため、「個人」よりも「集団」のイメージが強かった。しかし、校長先生からのお話を受け、総合は「個人」、「集団」は特別活動の分野であることを再認識することができた。津谷中学校では現在、総合的な学習の時間にESDの一環として「海洋」をテーマに3年間継続した個人探究を行っている。令和6年度は年度初めに「海洋」と関連する、「海」、「川」、「地球温暖化」、「海ごみ」についての専門家を招き、生徒たちはさまざまな角度から「海洋」というテーマについて学ぶ機会が与えられていた。津谷中学校の実践のように、総合的な学習の時間において身に付けるべき資質・能力を養うためには、各分野の専門家や地域の方々との交流など、生徒たちが自発

的に疑問や興味を抱けるような環境を整えることや「個人」で探究する活動時間を十分に確保することが大切であると学ぶことができた。

(3) 授業参観 数学 3年2組 「三平方の定理」

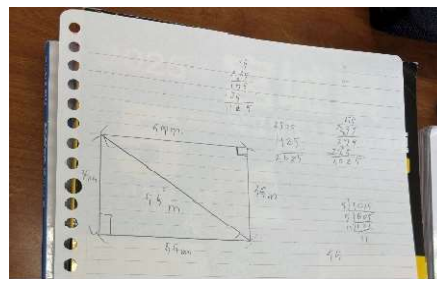
本単元は、単元内自由進度学習が進められ、本時は、「三平方の定理」の5時間目の授業であった。単元内自由進度学習を進めるにあたり、すべての授業を生徒に委ねるのではなく、単元内の最初の3時間は教師から生徒に基礎知識を教える時間、小テストで理解度を確認する時間が計画されており、その後の個別学習に支障をきたさないような配慮がなされていた。以下の写真は、授業の様子である。



教室で学習に取り組む生徒



グラウンドでサッカーコートを作っている生徒



サッカーコートを作るための計算ノート

教室で、教科書やA Iドリルを用いて学習する生徒や、図書室で一人静かに学習する生徒、グラウンドに出て三平方の定理を活用した活動を行う生徒など、多様な学習形態で授業が展開されていた。教室で学習していた生徒たちは、各自のスピードで問題演習に取り組みながら、分からないところは友人や教師にすぐ質問し、理解を深めている様子が見られた。グラウンドでは、生徒たちが部活動で使用するサッカーコートを作ろうとしていた。右の写真には、縦55m、横35mの規格でサッカーコートを作成するための計算過程が記されている。実際には、対角線の長さを計算ミスにより間違えていたり、メジャーを一つしか使わずにサッカーコートを作成しようとしていたりしているなど、規格通りのサッカーコートを作ることができなかった。しかし、生徒たちが帰ってきた後には、教師が生徒たちにフィードバックを行い、次のコート作成に向けて自己の学習を調整している生徒たちの様子が見られた。自由進度学習の中で、自然と協働的な学びが発生し、個別最適な学習が実現されていた授業だった。

(4) 小野寺 瞬 研究主任からの講話

研究主任の先生からは、実際に単元内自由進度学習を進める上での留意点を4点お話しいただいた。

- ① メタ認知が低い生徒への支援が必要であること。
- ② グループ学習が固定化され、本来の目的である自己調整が機能しない事態にならないこと。
- ③ ガイダンスを実施すること。(単元計画の説明、評価基準の共有)
- ④ 初めて学習する内容は、自由進度にしないこと。

今後、単元内自由進度学習を実施する際には、生徒の実態に合わせて単元計画を工夫したり、自由進度学習を取り入れた目的をきちんと共有したりしながら、個別最適な学習が実現できるようにしていきたい。

4 感想

私自身、普段から数学の授業をする上で、学力の二極化に悩みながら教材研究を続けてきた。これまでにさまざまな研修を受ける中で、度々単元内自由進度学習という言葉を目にし、学力の二極化の解決策として以前から興味をもっていた。そのような中で、単元内自由進度学習を実践している気仙沼市立津谷中学校の研究内容を学ぶ機会を得ることができ、実践に際して不透明だった部分について明確な答えを得ることができる充実した研修になった。これからも学び続ける姿勢を忘れずに、指導技能の向上に努めていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年11月8日（金）
- 2 派遣先 学校名 千葉大学教育学部附属特別支援学校
所在地 千葉県千葉市稲毛区長沼原町3-1-2 番地
<http://yougo.e.chiba-u.jp>

3 研修内容

全国特別支援教育研究部門合同研究集会の千葉大会にて視察を行った。研修内容は以下の三項目である。

第一に、全体会で行った千葉大学教育学部附属特別支援学校の研究テーマ「令和の教育的ニーズを踏まえた各教科等を合わせた指導」についての講話である。

第二に、学部別授業研究会で行った公開授業の内容を踏まえた授業研究会である。内容は、「生徒が活動に意義や価値を感じられる作業学習の授業作り～地域に開かれた作業学習の取り組みを通して～」についてである。授業者の反省後、全体協議会をし、植草学園大学発達教育学部准教授の高瀬先生から講話をいただいた。

第三に、全国分科会で行った「令和におけるキャリア教育」についてである。富山大学教育学部附属特別支援学校と信州大学教育学部附属特別支援学校の実践発表後、埼玉大学教育学部准教授の山中先生の講話・助言をいただいた。

4 感想

今回の研修を通し、本校に活かせることが数多くあったが、まずは考え方の転換が必要であると感じた。本大会のテーマは「令和の日本型学校教育を踏まえた特別支援教育を目指して」であった。この「令和」に着目する必要がある。将来への予測困難さが高まり急激に変化する今日だからこそ、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出すような力が支援学校の児童・生徒にも求められている。その中で新学習指導要領の着実な実施により、資質・能力を育成することがより一層重要となる。その過程としてAARサイクルを用いて今日求められている「個別最適な学び」や「協働的な学び」をし、資質・能力の育成に繋げる必要があると考えた。また、これらを教員主導で行うのではなく、生徒が活動に意義や価値を見出すことができるよう教員の指導を加え実践していくことを念頭におきたい。このような考え方の転換を基にし、本校で活用を推進していきたい事柄を以下三点述べる。

第一に、意義や価値がある作業学習の実施である。本校の作業学習の内容は、販売会に目を向け作ることに意義を見出す活動、もしくは将来の就労先と同等の作業内容を実施し能力の向上を図る活動がある。しかし、生徒の現状からは、それらの活動に意義や価値を見出し、資質能力の向上につなげようという意識をもっている生徒は少ない。よって、根本的な考えとして、生徒が作業学習をする意義を学校全体で再度考える必要があると考えた。今回の全国大会を行った、千葉大学教育学部附属特別支援学校では、売ることや能力を高めることを主として考えるのではなく、生徒が主体的かつ協働的な活動が展開できるよう、作業学習に意義や価値を位置づけ実践している。今回の授業公開では稲毛駅で行われる稲毛市の販売会に向けての作業学習であった。この「稲毛市」自体も生徒が企画・運営を試みている。また、この前段階として、7月に千葉大学で行われたキャンパス市にも販売をしている。ここで学び得た、商品の質の重要性を学習に活かし、農耕班では、野菜の成長のための土作りの学習や継続的に納品できるようにするために野菜の年間の成長過程を野菜ごとにファイルにまとめ、次年度にも活かせるようにしている。このように、本校と同様の販売会に向けた作業学習であっても、生徒自身が販売会を企画・運営するのか、売るために自分のことを考えさせているのか、販売会終了後にどのような視点で振り返りを行うのかなどねらいによって、作業学習に対する生徒の意義や価値は大きく変化すると考える。また、1時間の授業だけでなく、年間を通して、出来高や班としての達成率も提示し学習意欲の向上にも繋げていた。その他、作業棟の掲示物や朝礼、終礼の方法などにもその日の活動への意義や価値が見いだせる工夫が多くあった。このように、教師が生徒に向けてどのような変化を期待し支援指導をしているのか、また、一人の教員だけではなく、学校全体としてどのような意図をもち作業学習の指導をしていくのか、な

どの方向性を明確にする必要があると考えた。その先に意義や価値のある作業学習の実施と生徒の成長があると考えた。

第二に、12年間を通したキャリア教育である。本校では、小学部・中学部ともにキャリアパスポートの実施や職業の時間による学習機会はある。しかし、それら以外で12年間を通し、連続性をもたせたキャリア教育は難しい状況である。よって、高等部に入学してきた保護者と生徒の就労に対する意識は非常に低く、高等部に入学後から進路を考え出したり、3年生になっても進路に悩み続けたりする家庭もある。よって、高等部になってからのキャリア教育の充実だけでなく、12年間を通して少しずつ保護者や生徒に理解を図ることができる活動が必要であると考えた。今回の富山大学教育学部附属特別支援学校と信州大学教育学部附属特別支援学校の実践発表内容は、12年間を見通したキャリア教育であった。富山大学教育学部附属特別支援学校では、小学部の低学年から学校教育の中で手伝いをする活動を実施している。高学年からは、労働の報酬として現金のやり取りを教師と児童の間で行う。そして、その現金は校内の一人一人の貯金箱の中で保管される。その繰り返しで得た現金を用いて、校外学習においての買い物学習を行う。これらの一連の流れは毎日繰り返される。また、それらを記録したワークシートは毎日持ち帰り、保護者にも見ていただく。活動は金銭の報酬だけにスポットは当てておらず、他者から褒められる、感謝されることにも重視しており、手伝いをする場所や内容もそれらが還元される場所を個別に設定し取り組ませている。これらの活動により働くことへの意識を児童だけでなく保護者にも考える機会となる。また、おもちゃのお金ではなく本物でやりとりをするということにも意義があると考えた。金銭が関与するため1年間の中で毎日の実践は非常に困難だが、このような体験を年に数回行うだけでも児童・生徒や保護者の意識は変化すると考えた。また、信州大学教育学部附属特別支援学校では、作業単元学習という時間を中核に位置付け「自分たちの生活の中から生まれた願いを、作業的な活動を通して自分たちで実現していく学習」を行っていた。このように単元に重点をおいているからこそ教科名に「単元」が入っている。具体的には、一人一人が自分の製品を製作し販売して資金を得る「製品の製作に関わる活動」とその資金を基にして行われる「願い実現に関わる活動」がある。これらは生徒の願いに沿って学習内容を組織し単元を構成する。よって自分たちの願いを実現することへの筋道を立てその願いに向け活動し、そこから成功体験や課題を見い出すこととなる。この経験は児童・生徒の人生にとって大きな財産になると考えた。また、就労以前の学校教育内で身につけることにより、就労後に挫折しそうな時であっても活用できる力が養えると考えた。

第三に、地域に根付かせた教育の展開である。本校でも地域の方を招いて生徒の力となる活動や本校が主となり児童・生徒について知っていただく活動は多く行われている。しかし、さらに発展的に地域との関係を構築することにより、卒業後の生徒が地域でより安心して自分の居場所を作りやすくなるのではないかと考えた。今回の派遣先であった千葉大学教育学部附属特別支援学校では、生徒主体となり様々な方法で地域の方との関わりをもつ場を設けていた。具体的には、インスタグラムによる作業学習内容や販売会に向けた情報の提供や学校に常時無人販売所を設置し作業学習で育てた農作物の販売の中で、意見交換ノートを設置し感想を記入していただいている。また、農作物を食した後や商品を使用した後の感想を聞くことができるよう、Formsを活用し意見も集約している。SNSにおいては、生徒が主体となり、写真や文章の構成も考え作業学習の時間の一部を利用しアップをしている。また、フォロワーが増えるよう、インフルエンサーに情報提供を依頼し、より多くの方々に学校の取り組みを知っていただけるよう活動をしている。さらには協働で作業学習を行える企業もSNSで募っている。このような取り組みをすることで、将来の生徒にどれ程還元されるのかは未知数ではあるが、まずは生徒の保護者や関係者以外の方々に障害者についての理解を深めていただき、意見を交換できる場を設定することはとても重要なことではないかと考える。それが現代的な手段としてSNSを活用することにより、普段の生活では関わることがない、不特定多数の方々に知っていただけることとなり効果的だと思う。私たちの仕事は生徒が在学中の指導・支援が主ではあるが、生徒の人生は学校を卒業してからが長い社会生活となる。その地域で、生徒がより豊かに、また生活しやすい環境を、生徒と共に作り上げていくことは重要な仕事であると考えた。

以上三点を述べたが、他にも数多く取り入れたいことがあった。しかし、その根底にあるのは、生徒が主体的かつ意義をもち活動し、将来的に価値がある活動をすることであると考えた。そのような教育を私自身も日々実践していきたい。

- 1 派遣期日 令和6年12月14日（土）
- 2 派遣先 埼玉大学教育学部附属特別支援学校
埼玉県さいたま市北区日進町2-480
<http://fuyou.saitama-u.ac.jp/>
- 3 研修内容 (1) 研究についての全体会
(2) 公開授業（中学部1学年 生活単元学習「パン屋さんをひらこう」）
(3) 意見交換会
(4) 研究協議会（中学部）
(5) 講演会（文教大学教育学部特別支援教育専修教授 小野里美帆先生
「生涯発達の視点に立った授業づくりと評価
ー言語・コミュニケーション領域を中心にー」

4 感想

(1) 研究について

埼玉大学教育学部附属特別支援学校では、「児童生徒の確かな学びを目指した授業づくりー「各教科等を合わせた指導」の学習評価の研究ー」を行っている。生活に即した学習や体験的な学習を通し、一人一人のもてる力を最大限に発現させることによって、社会の主体としてたくましく生活できる子どもを育てることを目的としている。教育課程の中心に各教科等を合わせた指導をおき、生活そのものをとりだして教育的に組織して学習する「総合学習」として長年研究に取り組んでいる。

中教審「児童生徒の学習評価のあり方について（答申）」（H31）によると、身につけた力を各教科等の見方・考え方から説明することや取り扱う各教科等の目標・内容の明確化といった、「各教科等を合わせた指導」について、各教科等の学習へ学習評価に基づいた「授業・指導の評価」、授業改善を求めている。そのため、1・2年次の研究で、「各教科等を合わせた指導」において、学習内容の明確化、学習評価の改善・充実を図り児童生徒の確かな学びを育む授業づくりを行った。1単位時間、1單元ごとに学習する各教科等の目標・内容を明確にし、学習評価の方法や考え方を検討してきた。それにより、各教科等での学習内容を意識した授業づくりが可能となり、3観点での評価規準の意識化が図られた。今年度、3年次として、授業実践を通し、学習評価を効果的に活用した児童生徒の確かな学びを育む授業づくりとして研究に取り組んでいる。

現在、生活単元学習、作業学習、日常生活の指導、自立活動として「各教科等を合わせた指導」を行っている。児童生徒の実態に合わせて授業を考え、取り組んでいるところであるが、学習状況の評価や身に付けた力が何なのかを評価することが難しかった。この「各教科等を合わせた指導」において、取り扱う各教科等を明確にして学習を行うことは、指導を行う上で目標・内容が明らかになり、根拠に基づき学習活動を進めることができると思う。また、3観点の評価規準を意識することにもつながり、学習評価を踏まえた授業改善が行えるため有効であると思う。

(2) 公開授業について

授業では生活単元学習「パン屋さんをひらこう」を中心に参観した。本時は、「レッツ♡ゴーベーカリーをひらこう」で、調理、開店準備、接客練習、お店の運営を行った。生活単元学習だが、評価規準は各教科等から成り立っており、社会、国語、職業・家庭（職業分野）、職業・家庭（家庭分野）の目標及び評価規準が示されていた。授業の中では、個々の力を発揮できるように活動内容が設定されており、調理においては個に合わせて達成感を感じられる量や内容、時間が決められていた。また、他者との関わり合いの中から学ぶことができるように、活動中では生徒同士の関わる場面が設定されていた。

接客練習において、実際のお客様にパンを2択から選んでもらう「どちらにしますか。」の言葉と、選んだものをトレーにのせてお礼を言う「ありがとうございました。」の言葉

を使い分ける場面が設定されていた。ここでは主に国語中1段階ア「言葉の特徴や使い方」を取り扱っている。言葉を正しく使い分け接客をしながら選んだ商品をカウントする生徒、お客様を見て正しい言葉遣いに気を付けながら接客する生徒、接客カードを見ながら話す生徒と、生徒に合わせた接客方法で目標を達成できるよう支援があった。

このように、実際の授業場面において、各教科等の目標及び評価基準が示されることで、適切な支援方法が検討され、評価基準に基づいた評価を行うことができた。また、授業改善やより良い手立ての検討に役立つと思われる。

(3) 研究協議会

生徒D、生徒Eについて、評価の判断基準に基づき、個別の支援・手立て、学習評価についてKJ法を用いて話し合った。生徒D、生徒E共に個別の目標を達成しているが、さらに個別の支援として、自発的に作業に継続できるような手立てについて協議された。視覚的に終わりが分かるトレーを準備する、演示で模範を見せる、めくりカードを使う、お客様側を経験する、手本を置き自分で確認できるようにする、支援をするタイミングを見計らう等、今回の授業以外でも使える手立てがたくさん挙がった。支援のタイミングとは、学習の始めに決めた目標を、活動の直前にもう一度確認する時間を設けることで意識を向けるということである。

支援の際に取り入れると有効であるものは積極的に取り入れていきたい。また、個別の目標を立てる際も、生徒の目標は適切であるかをよく検討することが必要であると感じた。

(4) 講演会

確かな学びを目的とする計画的な授業づくりのアイデアとして、1)「意味の理解」、2)考えさせるプロセスを入れる、3)複数場面による同時的指導、4)要素を様々に変化させる、5)目標を文脈に入れ込む、6)機会の利用、7)発達理論から指導・支援を考える、が挙げられた。

- 1) 意味の理解…見通しをもたせるために手順を示すが、なぜその手順なのかの意味を考え、理解できるようにすることが重要である。なぜこの順番なのか、逆にしたらどうなるかを一緒に考え、合意形成を図りながら進めることが必要である。
- 2) 考えさせるプロセスを入れる…指さしやジェスチャーで表出を待つことから始まり、モデルの提示、語頭提示（語頭の1文字のヒントを提示）、間接指示（なんて言うんだっけ？と一緒に考える）、自発（ことば）表出を5秒程度待つ、というように段階的に援助する。
- 3) 複数場面による同時的指導、4) 要素を様々に変化させる…パターン化せず様々な要素を入れていくと、確かな学びにつながりやすい。
- 5) 目標を文脈に入れ込む…朝の会での子供同士のやり取りやファストフードでの注文場面のよう、構造化した場面＋相互交渉＋場面の繰り返しにより、固いパターンになるにくく、他者の意図を推測しながら行う事が、ことば・コミュニケーション手段の使い方の習得につながる。
- 6) 機会の利用…来客がある授業を他者と関わるチャンスと捉え、関わる機会を与える。
- 7) 発達理論から指導・支援を考える…大人の応答的で敏感な関わり、言語の刺激、言語模倣、動作模倣、共同注意、内的状態への言及が、数年後につながる確かな学びとなる。

講演を通して、児童生徒との共有・共感型の関わり方が、語彙を増やし、確かな学びへとつながっていることが分かった。ASD児においても好きな物や夢中になっていることに共感し、自由な自己表現を大切にすることで、主体的なコミュニケーションの発達を促すことができるという。児童生徒が、無理なく分かり、納得して理解できるようにするために、指導・支援目標を厳選し、確かな学びに結びつくアイデアを散りばめながら授業づくりを行っていきたい。

- 1 派遣期日 令和6年10月18日（金）
- 2 派遣先 学校名（会場名）群馬県総合教育センター
所在地 群馬県伊勢崎市今泉町1-233-2
- 3 研修内容
 - ① 特別講演 桐蔭横浜大学 佐藤豊教授 「今後の保健体育授業に期待されること」
 - ・ 多様な行き方が認められるインクルーシブ社会では、大人が不確実で激動の変化の時代への対応力が問われている。
 - ・ 「わかる」「できる」体育授業が求められている。
 - ② 第1分科会 総則の体育「自分に合ったマイプログラムを」体力の維持、向上に勤めよう
 - ・ 自分で体力向上プログラムを計画し、実行することで生涯にわたって豊かなスポーツライフを実践する意識を育む。
 - ③ 第2分科会 基礎・基本「基礎基本の定着が自己肯定感の向上にもつながる」
 - ・ 「自己肯定感の向上」を実際にはなかなか数値化できない。記録の向上や参加の態度など多岐にわたるチェック項目が必要。
 - ④ 第3分科会 指導法 「マット運動における技の出来映えを高める指導法の工夫」
 - ・ 「姿勢」や「動きのポイント」を明確にしたスモールステップのトレーニングドリル
 - ⑤ 第4分科会 保健・体育理論 「体育分野と保健分野の相互の関連をはかった指導と評価の在り方」
 - ・ 相互に関連をはかった学習カードの開発。場面に応じてICT機器の活用。

4 感想

今回、この先進校等調査派遣研修で、関東中学校保健体育研究協議会に参加、学習させていただき、多くの学びを得ることができました。まず、特別講演では、社会が多様化や国際化など刻一刻と変化していく中で、我々指導側もどんどんアップデートしていかなければいけないことに気付かされました。特に体育を通じて、運動能力や体力の向上を目標とするのではなく、これからの時代では規範性や公平性、ルール遵守、さらには多様性や、問題解決、合意形成能力まで指導していくことが求められる、という内容が印象的でした。

また、各分科会では、特色ある研究実践をたくさん見させていただき、非常に学びになりました。特に第1分科会と第2分科会の内容が印象に残りました。第1分科会では、体づくり運動において、自分の体力を分析し、その向上のための「マイプログラム」を作成し、実行し、どう変容していくか、という授業の発表でした。自分の体のことをしっかりと向き合い、継続的に努力する生徒の姿を発表で聞き、大きな学びとなりました。第2分科会の「基礎・基本」では、ハードル走におけるドリル練習によって、基礎基本がどれだけ定着し、生徒の記録やパフォーマンスが変容するか、という授業発表でした。技能の獲得のために学習カードが工夫されていたり、ICT機器の活用によって視覚的にわかりやすい工夫が随所にされており、生徒にとっては取り組みやすい内容だと感じました。全体的を通して、「主体的な学び」、「自己肯定感の向上」、「学び合いや教え合い」、「ICT機器の活用」、「基礎基本の定着」この辺りがキーワードになってくると感じました。

今回の学びを今後の指導に生かしていき、より研鑽を励んでいきます。

1 派遣期日 令和6年 8月 9日(金) ～ 8月 10日(土)

2 派遣先 学校名(会場名) 筑波大学附属小学校
所在地 東京都文京区大塚3-29-1

3 研修内容

① 第87回 国語教育全国大会 公開授業「豊かな言語生活を拓く国語教育の創造」
ー学び手の問いが育つ単元学習の開発ー

- ・ 生徒一人一人が創作した短歌をグループで推敲しながら、よりよい作品に仕上げていく協働学習。
- ・ 友達の作品を推敲するという言語活動は「思いを言葉でつなぐ」というより豊かで深い言語感覚が磨かれる活動となっていた。

② 校種別分科会① 中学校「読むこと(説明的文章)」

- ・ 「根拠を明確にして意見文を書く～非連続型テキストを活用して～」という単元開発を通して「文章の要点の素早い読み取りの能力」「資料の正確な読み取りの能力」「複数の資料の同時読みや比べ読みの能力」の育成を目指した授業実践

③ 校種別分科会② 中学校「読むこと(説明的文章)」

- ・ 「豊かな言語感覚を育む単元の開発と実践ー「言葉」と「見ること」の関係性を考えさせ、映像を言語化する表現活動を通してー」という研究実践報告を通して、言葉の順序や言葉の本質について生徒が考え、「言葉にこだわる」態度を育んだ実践発表

④ テーマ別分科会 ワークショップ基礎講座「楽しく夢中になる古典単元づくり」

- ・ リーフレットに「竹取物語」や「故事成語」についてまとめる活動を通して、リーフレットの特色である「折りたたんであるものを広げて読む」点を活用した「時差を考慮した順番配置」を考えたり、「情報と情報の関連性」を考え明示したり、「表現内容を精選し、レトリックを駆使した言語的仕掛け」を意識したりすることができた。

⑤ 単元学習実践研究発表「学習者が教室でファンタジーを読むということーアンデルセン『人魚姫』を扱った実践報告ー」

- ・ 学習者は言語表現に従ってファンタジー作品のフィクションとしての論理を受容し、想像したことを教室で語り合い、共有していくことで、フィクションとしてのリアリティを言語化し構築していく。

4 感想

今回、この先進校等調査派遣研修で、国語教育全国大会に参加、学習させていただき、多くの学びを得て、新たな視点に気付くことができました。まず、公開授業では、社会が多様化や情報化、グローバル化など刻一刻と変化していく中で、指導法も見直していかなければいけないことを感じました。言葉は、社会生活やふだんの生活を送る上で当たり前のようになっているものですが、こだわっていけば微妙なニュアンスや文脈など、際限なく使い分けられるものだということを改めて感じ、子どもたちの言語生活をより豊かなものにしたいと強く思いました。

また、各分科会では、特色ある実践研究をたくさん見せていただき、非常に学びになりました。テーマ別分科会ワークショップ基礎講座「楽しく夢中になる古典単元づくり」の内容が印象に残りました。リーフレットを活用した単元構想に、もともと興味がありましたが、特色を活かした具体的な授業構想や言語活動例を拝見できたことが、大変刺激になりました。

また、中高一貫校の強みとした「古典分野の体系的な学習」にむけて、同じ中学校の土壌で、古典の学習に力をいれている実践を学べたことが財産と感じました。

今回の学びを今後の指導に生かしていき、より研鑽を励んでいきます。